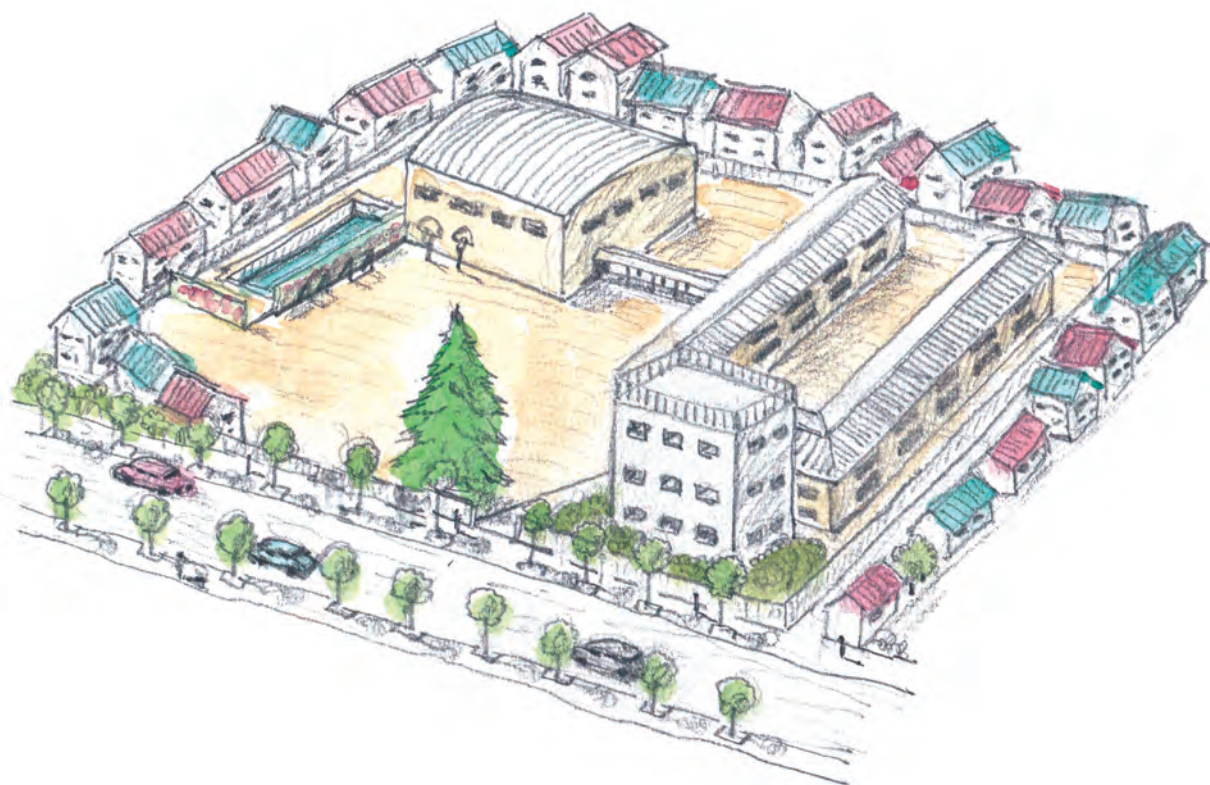


母校創立 100 周年記念文集

# 杉の友



都立目黒高校同窓会

# 東京都立目黒高等学校校歌

作詞 土岐善麿

作曲 平井康三郎

明るく美しく (♩ = 48)

1 みどりしーた たるすぎのこーず えーあ さぐもはて  
2 はるはさーく らのいろにかーすみーもみろうた  
3 めぐろこーう こにこーぞりーきんろうた

れゆくそらあかるしーしずかにらせいをみど  
りのそうじさあまねかーかのた おかこてをとりす

がきあーえばーてんちにしさくしんりのがやと  
もにゆーきでーゆうじゅうかじわらずしゃかれいたつと  
すむとーこーせかいはじだいのおれらむかえ

きーむねにはきぼうのひかいーりありー  
きてーひしゅうとふんかさへいーわーりー  
てーしゆとわかさへほこーるべしー

## 東京都立目黒高等学校校歌

都立目黒高等学校校歌は、土岐善麿先生の作詞、平井保喜（康三郎）先生の作曲によって完成され、1951（昭和26）年9月1日発表された。

目高新聞第3号によれば、高女時代に作られた校歌が、男女共学の新制高校に適さなくなったため、新校歌を要望する気運が起こり、1950年4月、生徒会を通じて全校に募集したが、適当な応募作品がなく、上記の両氏に依頼したという。

作詞者土岐善麿先生は当時日比谷図書館長、国語審議会会長であったが、校歌を通して「世界の中の日本という意識の下に、自己のすべてを生かし」、「常に清い気持で胸をはって進んでほしいと望まれた」と新聞は伝えている。

作曲者平井保喜先生は、1973年紫綬褒章受賞の輝かしい経歴の持ち主であるが、校歌の作曲にあたって、「此の詩の持つ上品さと落ち着きを表す為、拍子としては8分の6拍子を選び、メロディーは若人に適した明るく楽しいものを選ぶよう努力された由である。

この新しい校歌は生徒会・男女共学が完成年度にあたる3年目にタイミングよく発表され、生徒間の評判もよく、宮本校長も高校生に最適のものとしてほめておられる。

- 1 緑したたる杉のこずえ  
朝雲晴れゆく空あかるし  
静かに知性をみがきあえば  
天地にささくる真理のかがやき  
胸には希望の光あり
- 2 春は桜のいろにかすみ  
もみじは照りそう秋さわやか  
かの丘この路共にゆきて  
友情かわらず社会にたつとき  
ひとしく文化と平和あり
- 3 目黒高校ここにこそり  
勤労たのしく自主あまねし  
肩くみ手をとりすすむところ  
世界は時代のわれらを迎えて  
自由と若さを誇るべし

## 刊行にあたって

母校東京都立目黒高等学校は、本年四月、めでたく創立百周年を迎えました。

大正八年（1919年）、目黒村立目黒実科高等女学校として設立され、関東大震災や幾つもの戦禍を乗り越えて、戦後、昭和二十四年に男女共学、翌二十五年に現在の学校名となりました。

その百年の歩みに関しては、「百周年記念実行委員会」にて編集する、来年三月発行の「百周年誌」に詳細が記されますので、お読み頂ければと思います。

同窓会は、母校創立百周年記念の一環として、同窓会会報43号、同44号にて記念原稿の募集を行ったところ、元教職員の方、先生方、高女・高校の同窓会会員から六十通を超える原稿をお寄せいただきました。誠に有難く、お礼申し上げます。

太平洋戦争の戦渦を逞しく乗り越えた高女の方々、女学校から男女共学への移行時期、昭和二十七年の校舎焼失、ご自身の目高時代の思い出と人生の振り返り、そして恩師への感謝等々、この文集にて、母校百周年の一端をお読みいただけます。

今年、向田邦子さん（高女28回生）の生誕九十周年、そのイベントが各地で催されるとのことです。著書「父の詫び状」にも目黒高女への編入試験の話が載っており、この文集もタイミングの良い発刊となりました。

文集名は、「杉の友」といたしました。母校正門の杉の木は、高女時代から今日まで、いやこれからもずっと、どっしりと根を伸ばし、私たち目高生を見守ってくれるものと思います。

おわりに、母校の今後ますますの発展と、同窓会会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

令和元年八月一日

都立目黒高等学校同窓会  
「杉の友」編集委員一同

# 目次

刊行にあたって	1
目次	2
口絵(今昔物語)	4
目黒とともに	6
初めの校外卒業式	7
皆様に感謝です	8
目高の心	8
あの日、あの頃	9
小さな改革、大きな成果	10
目黒高校の時代(とき)	11
目高の木	12
目黒杉には、きょうだい樹があった!	13
硬式野球部創部の頃	14
「心外無別法」についての私感	15
平和な時代に感謝です	16
夏休みの思い出	18

都立目黒高等学校創立百周年の祝詞として	伊藤 和子	高校5回生	19
国語の教師をしたルーツは目黒高校	高橋 笑子	高校5回生	20
昔の先生	浅海 總一	高校6回生	22
目黒・今昔物語〜6回生懐古録〜	大内 秀明	高校6回生	23
母校創立100周年に寄せて	本藤 和男	高校7回生	24
都高連文化祭の思い出	鎌田 宏	高校8回生	25
目黒高校時代の思い出	内藤 錦樹	高校8回生	26
「広辞苑」をリビングに	菊地 芙美子	高校8回生	27
ヒマラヤ杉のもとで	三井 一雄	高校8回生	28
目黒高校の思い出	衣川 憲三	高校8回生	29
80歳の記	西川 尚武	高校9回生	30
母校の思い出	高城 清	高校11回生	31
目黒剣道部の産声〜よちよち歩きの日々〜	白鳥 哲雄	高校14回生	32
籠球部に入って	細田 有二	高校14回生	33
忘れ得ぬ年頭講演	因幡 邦彦	高校15回生	34
目黒高校、兄と私と弟と	福満 早苗	高校16回生	35
恩師 剣道部顧問 土居安夫先生 追想	大久保 康一	高校17回生	36
土居先生のお話	関口 徹	高校18回生	37

目高(めだか) 寄席	望月 一人	高校19回生……	38
色々ありすぎの……わが青春の目黒高校	大島 早苗	高校19回生……	39
人生の分岐点	三須 秀海	高校19回生……	39
目高を思う……先生方の思い出	新野 京子	高校20回生……	40
バスケット部の思い出	戸田 修	高校20回生……	41
目黒高校の思い出	安蔵 睦子	高校21回生……	41
ありがとう早春の会!	池田 直樹	高校21回生……	42
山岳部の思い出	安蔵 雅人	高校21回生……	43
三つの合宿	石田 三喜夫	高校21回生……	45
ラスト・ラン	横山 憲一	高校21回生……	46
入学時の木造校舎って	志村 明子	高校21回生……	47
長沢力先生との出会い	安養寺 重樹	高校22回生……	47
目黒高校の思い出	新倉 準一	高校23回生……	48
不思議なご縁	阿島 美恵子	高校23回生……	49
「歓喜の歌」歌いました!	平部 正和	高校23回生……	51
バレエとの絆、今も	竹内 浩	高校23回生……	52
今も昔も1年5組	51年前は新入生	高校23回生……	53
わたし きんちゃん	川野 和美	高校23回生……	54
今、伝えたいこと	橋本 千恵	高校24回生……	55
つなぐこと	斉藤 能規	高校24回生……	55
土居安夫先生の御指導	小室 憲彦	高校25回生……	56

都立目黒高校の創立100周年に寄せて	佐藤 栄一	高校26回生……	57
金メダリストの帰還	岡田 賢	高校26回生……	58
楽しかった都立目黒高校	篠永 玄一郎	高校27回生……	59
春合宿・三宅島合宿の思い出	小鹿原 賢	高校27回生……	59
軟式テニス部の思い出	石原 恵	高校28回生……	60
都立目黒高校をおもう	後藤 ゆうこ	高校33回生……	61
祐天寺のグラウンドで	中林 圭	高校38回生……	62
剣道部の繋がりと洗足少年剣道教室について	飯島 靖彦	高校40回生……	64
水泳部最後の男子副部長	松本 弘忠	高校46回生……	65
記憶の中の匂い	佐藤 裕太	高校55回生……	66
2003卒、白組副団長	小此木 翼	高校55回生……	67
編集後記/奥付	……	……	68



# 目黒高校「今昔物語」

## 写真でつづる

「十年一昔」とはよく言いますが、ここに掲載した写真は数十年もさかのぼるものもあります。同窓生でも知らない、昔、むかしの目黒の姿です。玉手箱ならぬ、宝物になれば…。

### 【校舎】



新 1999年10月30日に新校舎落成



旧 夕方には部活も終わりに人影もない校庭

### 【プール】



新 新校舎の屋上でできたプールは授業に部活にフル活躍



旧 昼休みは井戸端会議ならぬプール端会議

### 【制服】



新 昭和45年から制服の自由化もはじまる



旧 男女とも昔懐かしい学生服、着た切り雀だった？

## 【体育祭】



● 新 紅団、白団、緑団の3組に分かれての激突です



● 旧 「ワッショイ」「ソレ行け」の説明がある体育祭の  
のどかなコマ



## 【文化祭】



● 新 いまや「ダンス」は文化祭の定番になったよう



● 旧 座「狂言」「附子」の古典芸能の一場面(53年3年2組)



## 【部活動】



● 新 設備の整った体育館で回転レシーブもできます！



● 旧 ほうきで掃いて砂を除いた校庭で練習に励み、  
五輪金メダルを獲得



## 【祐天寺商店街】



● 新 同じ場所も近代的な街並みに、  
名称も「YUTENJI STREET」



● 旧 行きつけのお菓子屋さん「うれしの」や  
喫茶店で息抜きもしました





# 目黒高等学校

元教諭 吉井 芳江

家庭科 1947年～1982年

高女22回生(旧姓宇井)

目黒高校創立100周年を心よりお祝い申し上げます。

私は、昭和14年、韓国の京城(現在のソウル市)から目黒高女の3年に編入しました。父が編入先をいろいろ調べてくれましたが、当時、編入を受け付けてくれる学校がなく、目黒高女が受け付けてくれるとのこと、編入いたしました。

東京女子高等師範学校(現お茶ノ水女子大学)進学の後、昭和22年に教師として目黒に戻ってきました。そして、昭和27年に新制の目黒高校で英語を教えていた主人と結婚、昭和57年に退職するまで、ずっと目黒で過ごしてきました。退職後は同窓会の会長、顧問として学校とはかかわっていますので、まさに目黒とともに私の生活があったわけです。

35年という長い教員生活の中で一番記憶

に残っているのは、やはり校舎の火災のことです。昭和27年1月7日、私は日直で学校におりました。その日、授業はなく、部活の生徒と数人の先生が学校におりました。日直の私は校舎の見回りもしましたが、まさか不審者が侵入していたとは夢にも思いませんでした。

午前11時過ぎ、部活をしていた生徒が「大変です！ 火事です！」と職員室に駆け込んできて初めて火事と知りました。確か、鵜飼先生(数学)が消防に電話をしてくださったと記憶しています。中央階段下の物置から出火、盗みに入った浮浪児たちが盗むものがなくて、腹いせに火をつけたのだと後日判明しました。約1時間ほどで消火しましたが、13教室が全焼、6教室が半焼してしまいました。

火災後、授業は近くの五本木小学校や第五中学校(現中央中学校)の教室を借りて行われましたが、私は日直だったこともあり、消防、警察、東京都から事情聴取され、授業どころではありませんでした。卒業式も焼け跡の校庭で行われました。

私は教員生活35年という長い時間を目黒

で過ごしました。今では考えられないことですが、転勤の話もありませんでした。異動したくないといえば異動もなかった時代です。本人の意思を尊重してくれたのです。目黒の校風が私にはとても心地よく、同僚の先生方とも退職後お付き合いは続いています。

目黒高校のますますのご発展を心よりお祈りします。





# 初めての校外卒業式

元教師 下山 寅雄

理科・生物 1954年～1987年

昭和45年春の卒業生は世話の焼ける学年でした。いわゆる紛争学年でした。大学紛争真っ盛りで、安田講堂事件などは今に語り継がれています。高校生もその影響を受けて何かと主張が多かったのです。この年の学年主任は運悪く私でした。

最初に生徒が持ち出したのは、選択科目が希望通りにならない人がいるということでした。当事者が出席していなかったし、教員の人数に制限があるので不可能だと説明したりしましたが、いちいち生徒の発言を取り上げるなどという叱責も受けました。このころ男子は丸坊主頭に制帽制服でした。世間では長髪が流行り、生徒たちは自由を求めて学校全体の問題となり、制服制帽はなくなりました。

この年の一番の思い出は卒業式です。まず式を1、2年生も含めて全員でやってくれという希望がありました。それまでは体

育館で挙行していましたが、収容人数が限られるので1、2年生は代表数十人のみの出席でした。校外で式をすることには学年職員会でも反対がなかったので、事務室の協力を得て、世田谷区民会館を探し当てることができました。式次第も生徒が決め、これまでと変わり来賓挨拶なしなど、私に言わせれば「人民卒業式」でした。式の後で外に出てクラスに別れ、個別に卒業証書を渡して無事に終わりましたが、もう一騒動あるのではないかと心配したPTA会長が、それとなく私の傍らにいてくれたこととあとで気付きました。

(2年後に卒業式は渋谷公会堂にて全校生徒出席することが慣例となりました。)

この時にはおかしな裏話もありました。土屋校長に呼ばれて校長室に行くと、いきなり青筋を立てて「お前は俺の意をくんでいないじゃないか」と怒鳴りつけられました。どんなことかと聞いたら「卒業式をやらないうように動いているそうではないか」とのこと。

「そんなことはありません。全員が入れる世田谷区民会館を交渉中です」と答えたら、

それならいいと急変されました。3年の2学期から3学期にかけては、生徒ばかりでなく、職員にも色々の動きがあったようです。議題は忘れましたが、職員会議も夜遅くまで長くかかり、その内容や学年会議の様々までが生徒に流れているようでした。卒業式の在り方も制服問題も、生徒は誰かに指導されていたような気がします。

それまでの体制には確かに改革すべきものも多かったし、元気のよい諸君のやり方には行き過ぎた点もあって悩まされましたが、すべて記憶はおぼろです。



## 皆様に感謝です

元教諭 船山 恵子(旧姓内田)

保健体育 1960年～1984年

都立目黒高校100周年おめでとうございませう。

私は昭和三十五年四月に赴任いたしましたから二十四年の月日を過ごさせていただきました。

運動会、文化祭、修学旅行、水泳大会、マラソン大会等、多くの行事があり、忙しくも楽しい日々でした。その頃のマラソン大会は十二月、三年生全員参加で、ゴールした三年生の男子の何人かがずぶぬれ。聞くところによれば多摩川に放り込まれたとか、いや自分から飛び込んだとか…。

球技大会は、上級生下級生の別なく対戦するという厳しいものでした。

体育祭は校庭が狭くて会場を他に借りることが多く、予行演習はありませんでした。すべてぶっつけ本番という感じでしたが唯一女子の踊りにゆかたの着付練習をしたことがありました。

すべてにおいて穏やかで、先生方、生徒の皆さんに助けられた教師最初の学校でした。



卒業アルバムより



## 目高の心

元教諭 伊藤 操

理科・物理 1961年～1973年

一九六一年(昭和三十六年)大学卒業後、憧れの東京都立高高等学校の新任理科教師として目高に赴任いたしました。私は北海道の十勝出身で、片田舎者がいきなり東京の中心に赴任したのですから、いろいろと身につけなくてはならない事がありました。北海道方言・訛りを直したり、都立高校に入学する高レベルの生徒と接するには教科以外の事柄についても教養を高める必要がありました。この点では、年齢差があった先生方に素直に指導を仰ぐことが出来ました。

「菅平めぐろ山荘」においてホームルーム合宿を行ってりました。これは生徒のコミュニケーション力を伸ばす目的があり、目高の特色ある行事だったのです。ある年の菅平合宿の準備で教員による菅平の下見(視察)が行われた際、江野沢淑子先生が中心になり若手教員が下見を終えた後、江野

沢先生が俳句の手ほどきをして下さいました。俳句のおもしろさがわかり、自分でも読むようになり、久富哲雄先生が主宰していた句集「めぐろ」にも投稿したりしました。

目高にはヒマラヤ杉以外にも多くのイチヨの木がありました。銀杏が未だ残っている木に、私は棒を持って登り英語科の岩佐重義先生の指図をうけ最後の一粒まで収穫しました。先生は信州の出身で自然を愛する心が強く、生徒にも心を伝えたいと、卒業式で銀杏を贈るといいます。銀杏の実の部分を取りだすには、埋めておいた銀杏と土をよく攪拌し強烈な悪臭を放つ果肉と実を分離しなくてはなりません。木造校舎北側の二月の作業でした。その後、実を天日にさらし乾燥させ先生手作りの小さな紙袋に詰め旅立ちを待つのでした。

これらの目高の心の物語は先の東京オリピック頃ですから、生徒さんも古希を迎える人が多いと思います。

## あの日、あの頃

元教諭 彦坂 登實子(旧姓山口)

英語 1964年～1972年

都立目黒高校は外観こそ変わりましたがシンボルのヒマラヤ杉も健在です。百年の歴史は在校生や卒業生が一步一步踏み固めてきた足跡だと思うと感慨深いものがあります。私が知っている目高時代は、東京オリンピックや大阪万博があり、活気に満ちていた時代です。校内での日々の生活に加えて菅平高原でのホームルーム合宿やスキー教室・東北や関西への修学旅行・駒沢公園を借りての体育祭等印象に残る行事が盛沢山でした。

目黒高校は私が教師として第一歩を踏み出した思い出深い学校でもあります。『生徒にとつてわかる授業をする』という決意だけを抱いて教員生活を始めました。英語を通して古今東西の様々な文化に接することや色々な人々と直接間接に出会うことの楽しさを生徒と共有するのを夢見て……

人間は良い指導者に出会い、知識だけでなく、人生を築いて行くためのヒントを吸収出来たらとてもラッキーだと思います。でもそのような師は学校の中だけで出会う訳ではなく、地域や職場で出会うこともあります。私など毎日接する生徒からも多くのことを学びました。

ある哲学科への進学が決まった生徒が卒業式の日職員室へふらっと挨拶に来てくれたことがありました。彼は普段無口な生徒でしたが、『あなたは高校の教師に何を期待するの』と聞いてみたところ、ちょっと考えて、『特に何もしなくて良いから生徒の傍にいて毎日生徒と共に歩いてくれればいいんじゃないのかな?』と言ったのが忘れられません。私もそのようにゆったりと生徒に接すれば、生徒の姿がもっとよく見えたことだろうと思います。

皆さんにとつて高校時代はどんなものでしたか? 人生の一通過点ではありませんが、この機会にちらっと振り返ってみるのもいいでしょう。高校時代は子供から大人への転換期。ちよっぴり苦い思い出もあるでしょう。でもお気に入りの思い出だけを

集め直して自分も良く頑張ったなあとはめてやるのもいいのではないでしょうか。

今はテレビなどを通じて沢山の知識も得られるし、通販の利用で色々なものが容易く手に入る時代です。しかし、学校というこの贅沢な場に代わるものはないような気がします。短い期間でも密度の高いファーストハンドの経験が出来る貴重な場です。そこは試行錯誤が許される場で、結果が全てという世界ではありません。うまく出来なくてもいいのです。自分で直接経験してみることが大切なのです。

人生思いがけない出来事も多く、計画通りに進めないものですが、知恵を絞り、それを乗り越え、自分なりの今を作り上げている皆さんの姿を折に触れて目にし耳にするとホッとします。同時に素晴らしい知り合いがこんなにいることを嬉しく思います。これからも体力を維持し、何か夢中になれるものを持ち続けて行かれる様、応援しています。

## 小さな改革、大きな成果

元教師 佐藤 允彦

英語 1970年～1980年

私が英語教師として赴任したのは昭和45年でした。当時は大学紛争の影響を受けて高校でも授業妨害やボイコットなどがありました。目黒高校はそうした動向にもあまり影響を受けませんでした。校舎内は汚れていてひどい状況でした。新一年生を担当することになり入学式を迎えるために教室に行ってみるとゴミだらけで掃除した後すら見られません。一人で二時間かけてきれいにして新入生を迎えることができました。

当時は8クラスで、1組から4組までの男子は柔道選択者で、5組から8組までは剣道選択者で構成されていました。これは二人の素晴らしい体育の先生がいたことと、3年間の履修で技量を習得させたいという願いがあったからだと聞いています。高価な武具を3年間使いたいということもあったようです。しかし、この制度で柔道・

剣道クラスの雰囲気は全く異なり、授業にも少なからず影響がありました。2年次にクラス替えをするとき、男子は4クラス内で、女子は8クラスで分けることになり、女子からは不平等だと不満の声がありました。そこで、その解消を働きかけてようやく48年度の入学者から男子も8クラスに分けるようになりました。

もう一つ私が強く働きかけたのはクラス替えなしで2年、3年を持ち上げることでした。工業高校で3年間クラス替えなしの経験をした私は、2年次からクラス替えをしないで持ち上がり、生徒との人間関係を深めることが進路指導に資することを体験していたからです。お蔭で一人のドロップアウトも出さず40人全員を卒業させたことを今でも誇りに思っています。

偶然にも48年に入学した学年を2年次から担任することになり、大変うれしく、また、責任も強く感じました。51年春に卒業した生徒たちの進路の成果は期待以上に素晴らしく、これまでにない進路状況でした。

この学年の成果は卒業後の社会での活躍



ばかりでなく、卒業後2度も150名を超える参加者を得て盛大な同期会を開いて親睦を図っていることです。それらをアルバムにまとめてプレゼントしてくれました。私の大切な宝です。2年間同じクラスで過ごした事が濃密な人間関係を作れたのだと思います、この一体感こそ母校愛を育てる要素だと感じています。

45年から10年間に在籍して3度も卒業生を出せたこと、素晴らしい先生方や生徒たちに出会えたこと、NHKの学校放送の番組委員や文部省(当時)の大学入学者選抜委員の改善会議などにかかわれたことなど、目黒高校での経験はその後の私の人生に大きな影響を与えました。目黒高校の更なる発展を祈念いたします。

## 目黒高校の時代(とき)

教師人生における目黒高校の時代

元教師 関 閏 征 憲

理科・物理 1987年～1997年

「目黒高校とは、どんな学校であったのか」。私が最後に担任したクラスの「卒業文集」には、次の文を載せています。

『目黒高校は「自主自立の学校」です。生徒を信じ生徒の力を信じ、じつと待つが強制はしない先生たちがいきました。その中で君たちは三年間、先輩たちに学び、先生たちの姿勢に学び、時には悩み、少しずつ確実に成長してきました。これからの将来、この目黒高校で学んだこと、行ったことが君たち一人ひとりにとって、とっても大きな力となって花咲く時が来ると思います。今はまだ、気が付かないいろいろな多くの力が蓄えられています。ですから、目黒高校の卒業生であることに誇りと自信をもって生きてください。』

私は今年4月で退職後8年目を迎えます。

退職までは都立高校教員として35年間勤めることができました。前半は理科物理の教師として20年半は教科指導と校務分掌等に、後半は管理職として全力を注ぎできました。

目黒高校には教師人生の11年目に着任しました。教科指導においても、生活指導とホームルーム経営にも、それまでに実践研究したことに手ごたえを感じてきていた時期でありました。私の教師人生は初任校が下町の工業高校でした。2校目は多摩地区の新設高校で、ゼロからの学校づくりを生徒と教師がともに議論し「学校を創る」という貴重な経験ができました。このような経験の中でつかんだ自信を持ち、目黒高校での教師人生が始まりました。伝統校である目黒高校の教育「自主自立」とは何か、それは、「生徒には指示しない、生徒が気づく、発見するまで待つ」という指導でした。このことの最初の出会いが6月に実施された菅平めぐろ山荘で実施される移動教室の出発のバスの中でした。高校で初めての学年行事で生徒は興奮して友達とのおしゃべりが楽しく一向に止まない。ガイドさんは

人数確認を生徒に呼びかけるが、生徒は聞く耳持たずの状況であった。しびれを切らしたガイドさんは一番前に座る私担任に目配せをし、「担任の先生何とか言ってくださいよ」と言わんばかりの視線を向けていた。でも、私もここは生徒に任ず、生徒自らを感じ行動を起こすことをじっと見守った。しばらくすると点呼が始まり、バスは出発した。この出来事は私にとっては強烈な印象であり、目黒高校の伝統を感じた瞬間であった。

目黒高校では2回の担任をしました。私の最後のクラスの卒業文集に、次の「はなむけの言葉」を載せました。『何事にも自分の考えを持つように』、何事に対しても、自分の頭で、自分をごまかさないうように、納得のいくまで、よく考える。……。いずれにしても「科学的に考える」ということは「自分自身の頭で十分納得のいくまで考える」ということです。

目黒高校100周年、私の在職はその1割でしたが、素晴らしい高校で素晴らしい生徒たちと過ごすことができた貴重な時代でした。

## 目高の木

第十九代校長 齋藤 教子

1996年～2001年

決着しました。今、杉の根元にはヤブランが植えられ、初秋のころに紫色の花を付けます。学校を離れて随分経つのに、秋の初めに町でヤブランを見つけると目高の杉を懐かしく思い出します。

目黒高校へ第十九代の校長として赴任したのは平成八年四月でした。すでに校舎改築は始まっていて、グラウンドはすべて周囲を工事用のフェンスで囲われていました。校舎周囲を回って西側に行ったときフェンス越しに黒々と葉を茂らせた常緑樹の上部が見えました。椎の木でした。五、六本はあったと思います。北側の校舎裏には桜の老木が何本も枝を伸ばし、折から満開でした。無論圧巻は駒沢通りの正門にそびえる杉の大木です。学校史を繙くと、大正八年学校開設に当たって近隣の倉片定吉さんが寄贈されたとあります。亭々と枝を伸ばした大木はその頃テレビ番組に取り上げられ「目黒高校の名木」として紹介されていました。レバノン杉ともいわれ、先代の校長の時、レバノン国から表敬訪問を受けたこともあったようです。ただ、その後の調査で、これはヒマラヤ杉だということに

校舎改築が進んで、二年ほどたったころ植栽の計画が始まりました。校舎の東西南北にどのような植栽を行うか、そして西側道路拡幅のためセットバックが求められ、椎の古木をどうするかが問題になりました。時を同じくして西側に暮らす住民の方々から一軒を除いて連名の請願書が出されてきました。「五月ごろの椎の落ち葉が醜くて見るに堪えない。切ってほしい」というものでした。常盤木落ち葉といって常緑樹は夏前に古い葉を落とします。それは道に落ちると固く黒く散らばり、それが不快だとのことでした。都の意見は伐採か移植ですが、大木の移植にはかなりの費用を要します。近隣の住民の方々からの申し入れは、あるいは渡りに船だったのかもしれません。多くの卒業生が、その下で憩ったであろう椎の古木はあえなく伐採となりました。校舎改築が完了して一年ほど

経ったところ、請願をされた住民のおひとりが校長室を訪ねてこられて、「椎の木が切られてから、家の乾燥がひどい。玄関ドアは反り返っています」と仰られました。緑のもたらず潤いは大きなものだったので。

その他の植栽についてはメタセコイアと紅白の梅を是非にと希望しました。メタセコイアは、あくまで高く伸びて、樹形美しく、これが校舎の周りを囲んだら壮観だろうと思いましたが、落ち葉の始末が大変というところで却下、いま校舎南側に数本だけ丈高く育っています。春に先駆けて凜と咲く梅は校長室の窓の外に植えられました。その後、目高会の解散を記念して、栃木県足利市の篤志家が中国曲阜の孔子廟から

学問の木  
財団の思いをこめて  
孔子ゆかりの「楷の木」を  
目黒高校の正門などに植えました。  
前校長齋藤教子氏の願いによるものです。  
学校は「知の空間」をはらんでいます。  
そのごずえには未来の可能性がそよぎます。



学問の木

種を持ち帰って育てた、学問の木と言われる楷の木の苗を分けていただいて五本植えました。この木は暴れ木と言われてかなり好き放題に枝を伸ばします。折々に剪定をして樹形を正し、美しい大木に育てる所が学校にふさわしいのかもしれない。

目高は校章にもなった杉の大木をはじめ、緑多く潤いに満ちています。これから木を慈しみ、心身の成長を遂げられるよう祈っています。



## 目高杉には、きょうだい樹

があった！

元教諭 坂口 克彦

社会科・地理 1997年～2006年

メコウのシンボル「目高杉」。現在の正門である駒沢通り沿いの祐天寺側に、6階建て校舎とほぼ同じ高さでそびえ立っています。筆者は9年間勤務していましたが、「目高杉」はこれ一本という認識でした。ところが現在の勤務先「杉並区の豊多摩高校」に来てみて、杉が沢山あったことが分かりました。以下、豊多摩高校同窓会誌からエピソードを一部引用します。「校長の野津文雄先生から、前任校都立目黒高校にはメタセコイアがあったので、何本か貰ってきてもどうかとのお話がありました。早速、目黒高校の生物科高部先生に3本割愛してもらおう約束を取り付けました。高さは一間ほどということでしたが、根は相当の大きさになるはず。とても手で提げて電車でという訳にはいきません。昭和32年3月、自動三輪車で目黒高校へ受領に行きま

## 硬式野球部創部の頃

硬式野球部初代監督

元教諭 尾見 直人

理科・物理1998年～2007年

した。未舗装の道路を車は踊るようにして走るので、寒風にさらされ、中腰で荷台の縁につかまりながら祐天寺までの辛さは今でも忘れることのできない思い出です。持ち帰ったメタセコイア3本は、高さが2メートル足らず、太さは胸高直径1センチほど。春浅い故に芽吹いておらず、まるで割箸のような頼りないものでありました。」  
「どうでしょう。この記述からメコウには昭和32年時点で他校に譲っても困らないくらいに杉が植わっていたことになりませう。おかしいなと思つて筆者はメコウを訪ねてみました。そうすると、駒沢南門側に数本あるのですね。高さや太さは正門前のものにはかないませんが、ですが他校に譲れるような本数ではありません。長い年月のうち生き残つた数本なのであります。現役生や同窓生の皆様には、こちらも大切にしたいと思つています。ついでながら、勤務校に戴いた3本すべては「目高杉」同様、校舎6階程度の高さまで育ちました。ただし、近くの高圧電線に引っかかりそうだということで今年、剪定されてしまいました。」

私が目黒高校に赴任したとき、野球部は軟式の部活動でした。かつては関東大会で優勝したこともある伝統校でしたが、そのころ校舎改築もあつて部員数は減少し、活動も下火になっていました。前任校で硬式野球部の監督をしており、野球をやるなら硬式でやらせたいとの思いで、機会を見て硬式野球部にしようと考えていました。赴任当初、部員たちに「硬式をやらなにか」と持ちかけましたが、なかなか賛同を得られず、3年目にしてやっと「硬式をやりたい」という生徒に巡り会うことができました。

「硬式にしよう」と決意したのはいいのですが、グラウンドは狭く道具もない状況の下なので、まず体育科に相談したところ快く後押ししてもらえました。当時の齋藤教子校長も大変喜んでくれて、「同窓会から

は前から硬式にならないのかと言われていたんです。」と積極的に話を進めてくれました。同窓会もとても好意的にバックアップをしてくれて、当時同窓会が持つ財団法人（目黒山荘）の解散にともなう財産整理の一部で、ピッチングマシンやグラウンド整備用のトラクターを寄贈していただきました。なんとか創部にこぎ着け、2001年に高野連に登録し、その夏神宮球場で公式戦初出場を果たしました。相手は日大桜ヶ丘高校でももちろんコールドで敗れましたが、歴史的な第一歩を神宮球場でできたことは感慨深く、また貴重な体験でした。

創部当初は部員数もなかなか増えず、練習環境も非常に厳しい状態で苦労しましたが、この間野球部OB会には、一方ならぬご支援をいただきました。初出場を機にOB会がホームページを立ち上げ、応援メッセージを発信してくれたのを皮切りに、大会での盛大な応援や普段の練習試合にも駆けつけてくれました。特に鈴木会長は夏季合宿にも帯同してくれ、道具やマシンの運搬はもとより、グラウンドで部員とともに汗を流してくれました。突然合宿に訪



れ金一封の差し入れをくださったご年配のOBの方もおり、OB会にはとても暖かく見守っていただき感謝の念に堪えません。

チーム作りは厳しいものもありましたが、勝てないながらも一生懸命やっていたうちに選手の層も充実してきました。学校での練習は、グラウンドが狭いため内野ノック程度しかできず、バッティングは校庭の隅に手作りのバッティングケージを作ったの練習で明け暮れました。実戦練習はできず、当然練習試合はすべて遠征で、どこへも行きました。このころ、多摩川の旧巨人軍のグラウンドが借りられるようになり、夏休みはずいぶん通ったものです。選手たちの成長は目を見張るものがあり、その成果が出るようになって、2004年から、4回戦、3回戦、3回戦と勝ち進むことができました。その陰で支えてくれたマネージャーたちの頑張りも特筆に値し、部活動として充実していききました。

定期異動で目黒を去る時には多くのOBが駆けつけてくれ、これまでの苦労が報われた思いで感無量でした。多くの皆さんに支えられて充実した監督生活を送れた

ことを感謝しつつ、今後も野球部に対する暖かいご声援をお願いする次第です。

目黒高校100年の歴史の中で、小さな一歩ではありますが、確かな足跡を残せたことを嬉しく思うとともに、今後の目黒高校および同窓会のご発展をお祈りしています。



都目黒 朋優学院 東京成徳大高 渋谷

### 初出場4校 手探りの夏

野球部顧問 田中 啓一

全国高校野球選手権大会 東・西東京大会

軟式から転向 共学化で創部

120

念願の公式戦初勝利! 2004年7月1日  
都立目黒高校野球部の歴史に記さずにはいられない出来事!

## 「心外無別法」についての私感

元教師 剣道範士八段

土居 安夫 敬小

保健体育・剣道部顧問 1963年～1986年

この句の意味は、「人生はすべて心の持ち方一つで、幸、不幸も左右される。」ということであろうと考えます。

大乘仏教の「三界唯一心、心外無別法、神仏及衆生是三無差別」の中の一句です。

私がこの句に初めて触れたのは、昭和五十六年八月、富山県剣道練成講習会に中央講師として参加した際、道場正面に掲げられていた語です。

これまで度々剣道八段の審査会に挑戦し、審査が近づくにしたがい心は乱れ、当日は会場の異様なまでの雰囲気完全に負け、受審するまでもなく、最早や勝負がついてしまうような情けない思いを残していたとき、この句に触れることができたことはすばらしい出会いでございました。

業でも力でもない自分自身の全力を發揮できれば思い残すことはない。最後は心の

問題、心の外に妙法はない。総て心のもちよう一つでありましょう。つまり、人間は、心のもちよう一つ、「上を見てもきりなし、下を見て暮らせ」とのことわざにもあるように、心一つで万事が苦楽も幸も不幸も決まるのではないでしょうか。この心は、「平常心」と考えます。

平常心は、欲をもたない、そのものに夢中になり切ることができ、相手の剣先の鋭さ、恐ろしさなんか意に介せず、相手の剣を踏んで行く、所謂、「山川の瀬々に流るる柝殻も身をすててこそ浮かぶ瀬もあれ」に通じるのではないかと考えます。

私が大切にしている句の一つでございます。

土居安夫先生の主な活動の履歴

S 57年5月剣道教士八段授与さる

H 4年5月剣道範士の称号授与さる

（教諭・剣道指導・高体連関係）

S 38年～61年都立目黒高等学校、S 60年

～H 8年日本武道館武道学園、S 44年～H

15年大田区立洗足センター剣道教室、H 8

年～15年ゆうぼうと剣道教室

S 45年4月～S 61年3月東京都高等学校

体育連盟剣道部副部長

S 60年5月～S 61年5月全国高等学校体

育連盟剣道部副部長

（全日本剣道連盟審判歴）

S 61年～H元年全国青年大会（東京）審

判主任、審判長、H元年国民体育大会剣道

（北海道）審判員、H2年第38回全日本剣道

選手権大会審判員、H8年全日本少年練成

大会（日本武道館）審判長、H11年4月剣

道八段位審査員委嘱さる

（外務省並びに全日本剣道連盟等による海

外派遣）

H2年4月欧州剣道講習会・欧州剣道選

手権大会（西ベルリン）講師、英仏二か国

剣道指導、H2年8月武道学園、武道親善

使節団長にて豪州（シドニー）、H4年11月

外務省在日大使館文化月間にて剣道紹介

（ロシア・ブルガリア・ルーマニア・ポー

ランド）派遣さる

以上

## 目黒高校における

### 離任式の挨拶

（昭和53年4月11日）

「さらば、愛しの目高よ。

入魂の授業を目指した

日々だった。」

元教諭 長澤 力 敬へ

日本史 1967年～1978年

4月1日より東京の東のはずれにある忍岡高校に勤務することになりました。11年間、先生方の温かいご厚情と、日本史とともに学んだ卒業生諸君の励ましによって、今日までたどり着くことが出来ました。本当にありがとうございます。

私が心から愛する目高は、私に生きる喜びと教える誇りを与え続けてくれました。その目高と私は今日をもってお別れします。ただ残念で寂しさでいっぱいです。しかし、君たちにはその大切な目高生活がた

くさん残っています。本当に羨ましく思います。教室に、校庭に、全力で青春の思い出を刻みつけて下さい。特に、授業の一分は、先生方と君たちの人生のくいあいであると思われまます。お互いの人生のひとこまに、責任を持ちあっているのです。厳しい真剣さの中に学び続けてください。そして何十年かの後、子供・孫の手を引いてヒマラヤ杉の下に立った時に、若き日の自分の姿がはつきり浮かび上がるようになって下さい。

最後に3年生に一言申します。せつかく親しくなりかけた諸君と日本史の授業で接することなくお別れするのは申し訳なく、残念でなりません。目高生活の最後の一年の努力を願ってやみません。

長い間、本当にありがとうございました。

長澤先生がお亡くなりになり、その後、ご家族の方より同窓会に寄贈された写真や資料を基にまとめました。先生のお人柄が偲ばれるカットばかりだと思えます。

台掌



## 平和な時代に感謝です

高女22回生 酒井 美枝子

寒中お見舞い申し上げます。

お元気で新しい良き年をお迎えのことと存じます。

私はお蔭様で健康に恵まれ今年卒寿を迎





えます。

昨秋お話しをいただきました在学中の思い出ですが、入学時の印象は木造校舎で廊下の雑巾掛けが大変でした。

入学当時は同じ小学校からの五人のお友達と登下校しておりましたが、徐々にお友達も増えて今でも連絡を取りあっている方もいらっしやいます。

戦争が厳しくなり私共も学徒動員で目黒の精機光学(現(株)キヤノン)の機械部の旋盤で働いて居りました。

同封の写真は、同社の中庭で朝の体操をしているところ(終戦のラジオ放送をこの場所で聞きました)。いま一枚は仕事を終えて会社の通用口から帰るところです。私は四年で卒業(五年進学も可)し戦時中地味な服装(もんぺ)でしたので、少しは自分の好きな色柄を着たかったので洋裁学校に通いました。今思えば淋しい青春でした。

平和な時代に健康で毎日を過ごすこと感謝しております。

お寒くなりますので御身御大切に。

かしこ

## 夏休みの思い出

高女29回生 徳良 榮子(旧姓平本)

私は昭和十八年四月に東京市立目黒高等女学校に入学しました。三か月後の七月一日には東京市は東京都と改名しましたので、東京都立目黒高等女学校と変わりました。

その年の夏休みに希望者だけが、臨海学校がありました。一年生から五年生までの十人位づつで班を作りました。ご一緒に参加して下さったのは加藤因校長先生、宮内先生、吉野先生、佐野先生、松本先生、坂水先生方と事務局の方々十人位だったと思います。

両国駅に集合し、千葉県の勝浦へ向かい出発しました。宿は勝栄館といい、広間からは海が見えたように思います。毎朝砂浜に行き、打ち寄せる波の音を聞き、すがすがしい空気を吸いながら、朝礼、ラジオ体操をして宿に戻り、朝食をいただきます。日々予定された行事や水泳をして過ごしたので、真っ赤に日焼けして水泡が出



来て横になれない日もありましたが、薬を塗って何とか耐えて過ごしました。夕食後は広間に全員が集合して、俳句を作って発表しあったり、怪談を聞いたりゲームをしたり、楽しく過ごしました。あつという間に一週間は過ぎ、全員が真っ黒になって無事に東京へ戻りました。親身になってお世話下さった先生方や優しくして下さいた上級生と過ごした日々はいつになっても忘れられません。

私たちが二年生になった頃から戦争も激しくなり、四、五年生は軍需工場へ動員されて学校で姿が見えませんでした。三年生もいつの間にか逢えなくなり、私たち二年生も十二月から動員され、航空機の部品の組立作業をしました。工場も六月頃の空襲で焼けてしまい、その後は焼け跡の片付けに通いました。終戦後は学校へ戻り、新聞紙のような教科書を使って授業をしました。平和な時代の有難さが痛切に感じられます。

## 都立目黒高等学校創立

### 百周年の祝詞として

高校5回生 伊藤和子(旧姓石田)

私が入学した昭和二十五年は、三年生は全部女子組、二年生は女子組が七組と男女共学が一組、一年生は全部男女共学でした。

二年生の正月休みに、放火により校舎の一部が焼けてしまった。講堂を四分割して教室に使った。その年の卒業式は校庭で行った。校舎の落成式の時ピアノがなく、手回しの蓄音機がうまく作動せず、伴奏なしで校歌を歌った。卒業式にピアノが間に合わない事を知った前の注文主が、順番を譲って呉れてやっと間に合ったということもあった。楽しい事も苦しい事も経験して、私は社会人となった。

私が入社したのは大手電機メーカーだった。入社して身分は雇員、停年は五十歳で男性より五年早かった。戦後一貫して自由平等、男女同権と教育されて来た私には我

慢し難かった。しばらくして大手百貨店の求人広告を見て応募して合格した。目黒高校の担任石橋政男先生に内申書をお願いしに行った。

「君の気持は解った。ただ今でも一流会社に居るのだから、何も好き好んで日曜祭日に働くことはないじゃないか。僕が今より条件の良い所を捜してやるから、しばらく我慢しなさい」と諫められた。一ヶ月程して銀行を紹介されて、受験して合格し転職した。蒲田支店だった。



昭和28年(1953年)卒業後50年の2003年に、母校見学をした際の写真。

戦後の復興期で多忙を極めていた。60年  
安保の年の秋に日比谷支店に転勤になっ



セーラー服の写真は、昭和26年3月、バレーボール級対抗戦、我が1年7組メンバー  
番傘の写真は、昭和26年10月、2年生時の運動会仮装

た。地理的にも職場の状況も大きく変わり、大学の二部に通学が可能になった。

早速高校に内申書をお願いの電話を掛けた。科学としての社会学を学びたいと言った。私に、「社会学ならH大学でしょ。9年のブランクと言っても社会の第一線で働いて、人間は退歩するものではないと。貴女なら大丈夫です」。退歩しないと言い切る阿部茂木先生が羨ましかった。あの一言が私を合格させて呉れたと信じています。内申書一枚書くのにもこの心配り同様の感謝の念を持つ卒業生は沢山います。創立百周年おめでとうございます。

## 国語の教師をしたルーツは

目黒高校

高校5回生 高橋 笑子(旧姓渡辺)

横浜市大文理学部文科を出て、横浜市立の小学校を二年。中学の国語の教師を三十二年、血気盛んな中学時代の生徒と遇せた。殆どクラス担任をし、充実した教師生活を送れた。そのルーツは目黒高校。三つの原因による。

第一、私は小学校の時から遊ぶ事が好きで漢字を覚えなければならぬ国語が一番嫌い。算数が好きだった。目黒でも一年次数学だけが5の評価。一年次、安藤級に、鈴木さんといういつも本を読んでいる女子がいた。彼女は三学年共通テストで国語がトップ(へえー、本を読むと国語力がつくのか)。私はそれから図書館通いを始め、片っぱしから読みあさり本好き人間になった。その楽しい事、楽しい事。期末試験の中日に、「池上先生の物理、単位とれなくてもいいや。」と図書室に寄り、有島武郎の『或る女』上下巻の文庫本を借り出して帰

宅し、夜八時に読了てな事もした。現在でも本を手離せない私。

# \* 学校行事 \*



第二、二年の選択科目で古文をとった。先生は若い特攻隊生き残りの武田利明先生。『源氏物語』だった。何故か、何故かと考えさせる授業をして下さった。先生を気に入った何人かで下宿先迄押しかけ、カミユの『異邦人』から始まって、月一回約二年読書会をした。嫌な顔もせずよくもまあ対応してくれた。

第三、私は二年、三年と阿部茂木級。二年次最後、反省文を書けとの課題に、「来年も先生の級になりたい。」とだけ書いた。卒業式に欠席と決めていた所、親宛に長い電報が届き、意に沿わない優等賞を貰った。武田先生慰留運動参加を止めるよう説得されたり、他にも種々ご心配頂いた。それなのに、昭和三十年度生の卒業式に卒業生として祝辞を述べる栄を頂いたりした。卒業後阿部級は十回以上「七木会」なる同窓会を。オペラ歌手、大村博美さんが級友の娘さん。今も彼女出演オペラを級の友人と鑑賞しに行っている。



我が校焼ける (5 回生卒業アルバムの中から)



高橋さんからは、当時の火事を思い出して、短歌が添えられています。

「二月七日、学校火事とのニュースをばラジオで聞きし時の驚き」

「警官に何度も疑い掛けられた 図書室で勉強していた男子あり」

「死にたいと何度も思いし尋問に 負けるかと彼は耐えたり」

「学校にドロボウ目的浮浪児四人 六か月後に御用となりき」

「いくつかの小学校に分散し ともかくにも授業ありしよ」

## 昔の先生

高校6回生 浅海 總一

『昭和29年卒業の大友充さんをご存じですか?』と同窓会事務局から連絡が入り、急いで6回生の同期名簿をめぐりました。確かに私が作成した名簿には彼の名前はありますが全くの音信不通者でした。何で、どうしてと、60年ほど前に共に卒業した仲間が忽然と現れた理由を探ろうと、同窓会より知らされた電話番号を叩きました。

大友君が目黒高校同窓会のHPを見つけて連絡したそうです。私は事務局に会報を彼宛てに送付するようお願いし、数日後、彼からこれほど立派な会報を贈って頂きました。お志を戴けるならばご寄付をと応募、その後、彼からは一万円の寄付を戴きました。又、その年の平成29年の同窓会総会に出席を要請、終了後の同期会へも出席して貰いました。

本題は、この席上で話された彼と中野香代子先生との心温まるエピソードです。

彼は転入生でしたが、彼の話では母子家庭で貧しく、学業を続けるには育英会の奨学金を得たいとの思いで中野先生に相談。先生は彼ともう一人の男子学生を自宅に寄宿させ、二泊三日の特別授業を施して呉れたそうです。そのお蔭で彼は昭和28年4月から昭和29年3月までの一年間、日本育英会から奨学金を貸与されました。卒業後の生活については多くを語りませんでした。が、苦労された結果、起業。社員40名を抱える会社社長として、東芝に製品を納める安定した会社に育てあげたそうです。今は娘に社長職を譲り会社の安泰を図ったのだと、同期会の出席者に誇らしく現状報告をしていました。

後日、彼から、『同窓会の会報を熟読したら、中野先生が介護施設にて生活されているとの事、お会いして御礼を申し上げたい』と。11月末であり、来春、暖かくなればと話し合いましたが、中野先生はこの年12月に100歳にて他界、先生を追うように彼も翌年1月に突然亡くなっていました。彼が一年早く現れて先生への心からの感謝を届けて欲しかったと誠に残念に



思っています。今は、お二人が天国にて語らい続けておられる事でしょう。

先生として、これが当たり前のように、苦勞を厭わず困った生徒を助けた中野先生。昔の人情厚い良き時代が懐かしいです。現今の先生方には、管理の厳しい時代となり、先生としての理想を掲げながらも中野先生のような教育が難しいでしょう。しかし教育者としての情熱と志を持ち続けて欲しいと思います。



61年目の同期会

## 目高・今昔物語

### 〈6回生懐古録〉

高校6回生 大内 秀明

昭和26年と言えば、未だ戦後と言う言葉が盛んに使われていた時代、その4月に私達、高校6回生は、当時、今のみよし通りに面し西北の角に位置していた、高女時代からの古い講堂で入学式を迎えた。そしてそこで流れていた校歌は、やはり高女時代からのものであったと思われる。何故ならば、現在の校歌は、私達の入学後の秋に完成したからである。

当時の目高は、2学年上の4回生が高女時代から在籍の女子350名に、旧制中学から編入の男子約40名、そして新制中学一期生である5回生から私達を含め、しばらくは、各学年男子150名女子200名(7クラス)といった構成で、多分に高女時代の雰囲気が残っていたように記憶している。また、入学当時の写真を取り出してみると、約20名ばかりのクラス内の男子

は、殆どが丸坊主で、長髪は1、2名程度であった。

私達は、こうした状況の下で高校生活をスタートさせた訳であったが、何と云っても強烈な思い出は、1年次の冬休みに起った校舎の火災であった。原因は浮浪児らの放火と後に判明したが、この時焼失した歴史ある木造校舎は、私達1年生の教室が主体であったため、急遽、私達は、5クラスが五本木小学校に、2クラスが当時の区立五中(現中央)に間借りすることになり、この分校生活は、2年秋の新校舎落成までの約10ヶ月ばかり続くことになったのである。

しかし、この間のことは、不自由さよりもむしろ、当時、祐天寺に隣接していた第2グラウンドでの体育授業を初め、本校との往復に味わった解放感の方が強かったようであった。その後、私は生徒会機構の改革に取り組んだり、運動会の仮装行列に無い知恵を絞ったりと、今日と比較すると、物質面では恵まれません、いろいろなレジャーとも無縁の時代ではあったが、それだけに結構思い出深い高校生活を送らせて貰った

と感じてもいる。

また、この間、女子が圧倒的多数を占めていた、4回生の卒業があったことに加え、野球部(当時は軟式)の設立を初め、男子の部活もかなり目立つようになるなど、所謂、共学校としての体制が少しずつ軌道に乗って来ていたことも思い出されることの一つである。

さて、最後となったが、創立百周年は、あくまで一つの大きな節目に過ぎず、これからも「自主・自立」の伝統を堅持して、更なる発展を目指して貰いたいと、心から願っていることを敢えてつけ加えたい。



## 母校創立100周年に寄せて

高校7回生 本藤 和男

7期卒業生同期会世話人代表

ヒマラヤ杉の校門を去って、早や64年が過ぎ、今や82歳となり、憶い出多い青春時代を振り返って見ると、入学時には、前年の校舎火災により、校舎の一部が焼失し、残った古びた学校の姿を見ながらの入学式となり、希望に胸ふくらませた少年期には一抹の不安を感じさせた事に記憶がよみがえってきます。

新生には学校側の配慮もあり、講堂をベニア板で区切った、にわか作りの四つの教室があり、授業中には隣りの講義がつつぬけ、又、生徒の喧騒が混じり合う情況でありました。しかしそんな環境の中での学内生活にも、徐々に慣れ、その間に校舎の復興も進んで普通の学生生活に戻って過ごしてまいりました。

二年生を迎える頃には、その時代の背景もあり、郊外、クラブ活動が活発となり、政治色が強まり反戦運動や原爆禁止の集

会もあり、その一方、クラブ活動の中では、アメリカン・スクールの学生とのバスケットボールの交流試合、夏には千葉内房の岩井海岸での臨海学校、冬には後楽園でのアイススケート教室に参加して、学生生活も多彩となり、高校生活を楽しみながら過ごすことが出来るようになりました。

三年生も夏休みが終わる頃からは、大学受験を控え、授業が終わると大半の友人が早々に帰路に就き、校庭でのクラブ活動やスポーツ活動は影をひそめ校内の活気が失われ、閑散とした情景がそこにありました。

昭和30年の春には互いに再会を約しながら校門を去って行きました。その後20年



の歳月が過ぎ、学校主催の同窓会に出向き互いに再会をなつかしく、立派な社会人となった姿がそこにありました。再会をきっかけに同期会の発足につながり、その後、40年にわたって食事会、旅行会を行い、今日の日を元気に過ごしています。



## 都高連文化祭の思い出

高校8回生 鎌田 宏

話は1955年(昭和30年)秋のこと。

その日、大内先輩に呼び出され生徒会室に行くこと、見知らぬ詰襟の人物がいて、話しは既に始まっていた。

先輩が身分証明を要求すると、先方はその用心深さを誉めてから、秋に学習院にて、「東京都高等学校連合文化祭」にて各校が演劇を行うと言う。

政治的に幼かった私には理解しにくい話だったし、まず予算ゼロでは何も出来ないというのが、素直な感想であった。

大変急な話ではあったが、わが校の出し物は、「飛弾の匠」(幸田露伴の五重塔を高校演劇向けにしたもの)に決まり、当日学習院の中講堂で上演された。

朝から照明に使うゼラチンを探して目白を飛び回った。

芝居は大当たり、黒服の守衛さんも大きな拍手をしてくれた。

良き思い出であった。

(注)

現在でも、「東京都高等学校文化祭」は、演劇・合唱・写真等の各部門に分かれて、開催されております。鎌田さんのお話は60年以上も前のことですが、演目としての「飛弾の匠」に当時が偲ばれます。

(同窓会事務)



# 目黒高校時代の思い出

高校8回生 内藤 錦樹

母校の百周年記念文集の刊行を祝いつつ、われら高校8回6組生は、2016年に、卒業60周年と併せて、3年次ご担任の田山先生の生誕百年を記念して、有志で記念文集を出させていただきました。

会の名称は、田山先生がご自分の干支が辰年なので、「龍子会(りゅうしかい)」と名付けてくださり、ご存命中は2000年まで、毎年ご出席していただきました。

1988年には、2泊3日で、京都府に窯を開いた竹田(旧姓・加藤)君宅を有志でたずね、旧交を温めることができ、今となっては、貴重な思い出となっています。ご馳走と泊まったお礼に、田山先生は、われわれの倍の寸志をお出しくくださったのに、徳利とお猪口のみを所望されたのが、印象に残っています。同行の女性陣は、自宅にまで竹田君の作品を送ってほしいと頼んでいたほどでしたが……。

「龍子会」は今でも、毎年、都内で開催し

ており、先年は、大岡山の先生宅に伺い、お焼香の後、近くの精養軒で、お元気な奥様も同席された懇親会を開催いたしました。

記念文集の原稿は、各人思い思いの内容でしたが、おのずと田山先生との関わりを書いた級友が多く、卒業時の就職や進学のほか結婚などについて、適切なアドバイスをいただいたお礼の言葉が多かったです。田山先生は、当時、わずか17、8歳のわれわれ生徒を、大人として接してくださいだったので嬉しかったようです。

ある時の「龍子会」で、じつは、6組の担任を引き受ける際に、問題の生徒を引き受けるのと併せて、美形の生徒を要望した「裏話」を吐露されたのには、一同驚きました。それ以降、出席者一同、自分ほどの範疇に入っていたのか考える機会になったのも事実です。美形と思われる女子生徒が、就職時の推薦文に「端麗」と付記されたことに異議を申し立てたら、田山先生は、「これは私を感じていることを書いたもので、このままでよいのです」といわれたのとです。

田山先生は、新宿高校長の後、教職経験を総括されて、『自葬記』という名文によるご著書を出されただけに、含蓄のあるお言葉を寄せられることが多かったのも事実であります。

小生の印象としては、田山先生は、達観しておられる立ち振る舞いに近寄りがたく、卒業しても、しばらくの間、ご無沙汰していましたが、ご就職後、日本修学旅行協会の専務理事になられたら、ある日、突然、その機関誌に何か書くようにとのご下命があつて以来、お近づきになったことなど、思い出はつきません。



卒業直後にご担任の田山先生と一緒に深大寺を散策、真ん中でレインコートを着ているのが私です。



# 〓 広辞苑〓 をリビングに

高校8回生 菊地 芙美子 (旧姓 透)

我が家のリビングの棚に、51年間暮しを共にしている〓 広辞苑〓 があります。これは田山先生からの結婚祝いです。結婚式が決まった時、平素ご無沙汰の先生に、いきなり招待状を送ったところ、「式の前に会いたい」とお返事があり、自由が丘の駅で待ち合わせる事になったのです。当日駅近くの蕎麦屋で、近況をボソボソ話すと、先生は「結婚前には両目を開けて、結婚したら片目を閉じよ」ということわざがあるよ」「はい、すでに片目です」、「それなら大丈夫だ」と会話を交わし、笑いあったのでした。

帰りに駅前の本屋で、ずっしり重い〓 広辞苑〓 を買って下さり、「必ずリビングに置くように」と言われました。家事と育児に追われる暮らしでも、それに終始せず〓 辞書を紐解く〓 ことを忘れぬように、という事だったのでしょいか？

子育て中に出会った子ども文庫に関わ

り、それがきっかけで幼稚園や学校で、子ども達に古今東西の昔話を語り、絵本を読むボランティアを続けて40年、言葉をお届ける仕事に辞書は必要でした。先生には想像もつかなかったことでしょうが、昨今はパソコンの出番が多くなりました。それでも広辞苑は助っ人として我が家のリビングに鎮座し続けています。

「龍子笑語時雨ふる窓の夜は更けぬ」

級友の内藤さんのお世話で、那須のつじ、伊豆の河津桜、田貫湖のダイヤモンド富士など、思い出に残る数々の旅を満喫させてもらいました。ことに印象深かったのは、28年前に参加した級友竹田さんの工房への旅です。丹波篠山城跡見学、ぼたん鍋を賞味し、夜は工房の一枚板の長い座卓に、先生と元生徒が居並び四方山話に花を咲かせたのでした。その折、先生が筆を取って句を詠み、竹田さんがそれに画を添えたのです。室内の温かい歓談を窓の外の冷たい雨が覗き込む晩秋の夜でした。〓 外は冷たそうだけど、心の内は温かい〓 田山先生の印象を象徴しているようで、大切に額に納めています。

二つの思い出の品は、私の根っこの大切な宝物です。3年6組でのたった一年間のご縁が、龍子会として60年も脈々と続いていくのは、歴代幹事のお力と、それに協力する級友の、会への〓 想い〓 の賜物と感謝しています。



# ヒマラヤ杉の思い出

高校8回生 三井 一雄

目黒高校を卒業してから60年、月並みだが正に「光陰矢のごとし」である。

昭和28年春、入学式に父と共に初めて校門をくぐった。そこには大きな杉の樹があり、校章や校歌に引用されているヒマラヤ杉であった。1学年は男子のみのクラス、知らぬ間に弁当を交換されたり、半数近くが昼前に弁当を食べてしまったり、担任の安藤先生から厳しく叱られたことがあった。

当時の入学制度は第一志望に不合格でも成績次第で第2志望校に入れたので、優秀な生徒が多く、この影響で私の進学熱が目覚めたものとも思っている。

2年は男女共学制となり、クラス担任が田山先生で初めての対面となる。先生は出席をとる前に「女子生徒の名前を呼ぶ場合も男子生徒と同じく○○君とします」と言われ、少々シャイな先生だと感じた。ホームルームの時に教科以外の興味ある話を聞

いている。過去に出版社を経営して失敗したこと、軍隊時代に将校であったこと、その時に使った日本刀は重くて、時代劇のように振り回すことはとてもできないこと等……60年を過ぎても憶えている。

3年の担任はやはり田山先生であった。各自、進学か就職かの進路が決り、これによりクラス編成がなされたかに思った。しかし卒業後の同窓会で田山先生曰く、「この組は問題児を引き受ける代りに美人の女子生徒を集めた」とのこと、私にはその様な印象は全くなかった。一浪をして大に合格したことを報告に行った時、「君が国立大学に入ったということは教師として反省しなければ……」と言われたのを聞いた時、私も問題児のひとりだったのでないかと今でも思っている。

3年間は自分でも意外と思う無欠席の通学であったが、この間母校のエンブレム「ヒマラヤ杉」を見上げたことも無く、今思えば「緑したたる杉」に申し訳ないような気がする。

卒業後、A君の世話で1学年時の仲間10人の「十訓会」と称する会を発足した。キャ

ンプ・海水浴、そして渋谷での飲み会等、楽しかった思い出がある。残念なことにA君を含めメンバーの半数が他界し、会う機会もなく、寂しい限りである。「一番の親不孝は、親より先に死んで、その悲しみを親に与えることだ」と言う先生からの訓話があった。幸にも私の両親は十数年前に亡くなり、これだけは先生の教えを守った。

辰年の先生と教え子、「龍子会」は発足以来60年、あと何年続くかは我々同級生の寿命に懸っている。

ところで、あの「ヒマラヤ杉」は今頃どうなっているのだろうか……。



ヒマラヤ杉

# 目黒高校の思い出

高校8回生 衣川 憲三

私は、昭和28年度の入試を経て都立目黒高校に入学しました。入学時、希望に満ちた気持ちで高校時代のスタートを切ったことを鮮明に覚えております。まず、驚いたことは、7クラスの中で1〜3組は男子のみ、4〜7組は女子のみのクラスでありました。この意義は不明でしたが、結果として、デメリットが多かったものと思われ、次年度より、従前のように男女混合のクラス分けになり、良かったです。

授業科目のうち最も重要と思われる英語は、高校の入学試験に含まれていなかったことで、中学時代1年時トップクラスにおりましたが勉強を怠り、急落し、高校で好スタートを切れず、後々苦慮しました。また、国語、社会は苦手科目につき、授業時間が長く感じられ、特に古文、漢文は、非常に難解で、試験点数も一桁の時もありました。

ところで、数学(当時、解析Ⅰ、解析Ⅱ)

は、故鵜沢先生に特に鼻肩にして頂き、授業時間が極端に短く感じられ、授業の内容、最高点を頂いたことなど含め良い思い出です。

また、理科(物理、化学)につきましては、橋奥、池上両先生の授業が良く理解でき、60年余り経過した現在でも記憶の中であり、大学卒業後に入社した企業(シンフォ



ニアテクノロジー)においての50年間の特許業務に多いに役立っております。

なお、高校3年のおりには、大学受験にて、おもいのほか、苦戦し、数年間相談のつて頂き、多数枚の調査書を作成頂いたことに対し、担任の故阿部茂木先生に対しい感謝の気持ちで一杯です。加えて、同先生には93歳なられるまでクラス会、電話、年賀



状などでご交誼頂いたことは忘れられない  
思い出です。

現在、私は81歳で、年金生活ですが、健康に留意しつつ、毎日を楽しく過ごしていきたいと思えます。また、目黒高校のますますのご隆盛を祈念いたします。

## 80歳の記

高校9回生 西川 尚武

80年の人生、何故自分は繊維産業を専攻したのか。目黒高校時代、「女工哀史」や、詩集「機械の中の青春」等を読み、日本資本主義を支えている主人公とは繊維産業であり、繊維産業で働くことこそ、意義のある生き方だと自分に言い聞かせ、大学も就職もその方向で選択した。高分子化学は実に面白かった。40歳を機に東洋紡から豊田自動織機に転職、化学から機械へ大きく専門分野の転換に挑戦した。豊田では設計課長として図面を片手に国内外に出張、益々繊維産業は面白いと自分の人生選択を肯定し喜んだ。現役時代そして定年後を含めて海外へは合計90回以上は出張しただろうか。

1990年代、豊田グループでは、「物づくり」の大切さをテーマに名古屋に産業技術記念館を創設することを決定、企画メンバーに選ばれ担当重役と共に、英国、フランス、ドイツ、イタリア、スイスの全博

物館を1ヶ月間くまなく見学、創設する豊田産業技術記念館の礎創りに寄与した。

定年後、技術士を条件に、外務省JICAの仕事で、ウズベキスタンに駐在。ウズベキスタンはソ連崩壊後どう自国繊維産業を発展させるべきか苦しんでおり、日本政府を通じウズベキスタン政府直属コンサルタントになった。現地での会話は全てロシア語、若い頃、敦賀ナイロン工場勤務時代、ロシア語講座に2年間通い続けたのが随分役立つ。海外出張先ではいつも旅スケッチに没入、海外スケッチ紀行は全てホームページに公開しています。しかし最愛の妻を乳がんで亡くし、外務省勤務は中途辞退させて頂いた。70歳の時、名工大同窓会総会で「マンチェスターの栄光と没落そして再生」なる講演をさせてもらい、機械学会誌にも論文掲載して貰った。

今年80歳になりました。自分は繊維産業を生涯の仕事としてきたが、息子は、IT産業を生涯の仕事に選んだ。東京大学大学院電子工学で学び、ソニーに勤務。繊維産業の親父と、IT産業の息子、どんな違いが出てくるか、息子の成長を愛情深く見





守っています。

60年前、目黒高校の卒業文集に「我が高校時代」を投稿したが、その後編を書いてみようとして、「80歳の記」を書いてみました。

詳細は、僕のホームページに掲載してありますので、是非ご一読下さい。「旅スケッチと読書ノート」のホームページ：<http://www.eva.hi-ho.ne.jp/nishikawasan/>



## 母校の思い出

高校11年生 高城 清

青春真っ只中の忘れられない思い出として、母校の夏山登山とバスケの部活を挙げたい。

夏休み中の行事として、二泊三日の夏山行事は山梨・長野に跨る山塊、南北30km余りの山体で、八ヶ岳は深田久弥が選定した日本百名山の一つである。天気も良く夏沢峠経由で本沢温泉に宿をとる。見上げる山容の偉大さが目にやきついている。三日間とも上天気で主峰赤岳(2,899m)を中心に、二日間右に左に硫黄岳、横岳と天狗岳、阿弥陀岳を踏破。女性のリュックを前に自分のリュックを後ろにバランス(?)をとり登った事も今は思い出。後にも先にもそんな縦走をした事はこの時だけ。若さのページは明らかで山好きになり、その後子供達を連れて専ら低山を歩いてきた。念願の富士山は九合目で両足がつり七十七歳の現在は征服が遠のいた。何とも良い計画に感謝に堪えない。この行事に参

加して部活をしていた為、秋のプール試験は、「お腹が痛い」と欠席(その時カナヅチ)したのにバスしたのには驚いた。

その部活は一年で、少しノッポで引つ張られたのがバスケ部。男性五人目でその後入部者はなく、今では考えられない青空天井の中庭のコンクリの上でボールを扱っていたからたまらない。教室の窓からの視線も気になっていたが……。

そんなの見ていないね(笑)。部長以下一生懸命よく動いた事を記憶している。残念ながら公式戦全敗の気がするが、試合形式の練習は五人のみで女子相手だった気がする。本当にご苦労様(部長発案の同窓会を祐天寺で開き、昨年で十三回目を迎えました)。

音楽部も兼業し、目黒公会堂での高頭君と女性二人とのコーラス発表も強烈な印象で、音楽好きの原点です。

人間形成のインパクトと楽しみを追いかけた目黒高校時代の思い出は、一生尽きる事なく、忘れる事なく、私の胸に燃え続けています。

## 目高剣道部の産声

くよちよち歩きの日々く

高校14回生 白鳥 哲雄

初代剣道部部長

昭和三十四年、入学式会場の入口で、「君、剣道部に入らないか」と声をかけられ、二つ返事で入会を応諾。(当時は、部ではなく同好会であった)さて、稽古初日の顔ぶれは、上級生三人と新入生三人、何とも寂しい限りであった。以後、各人仲間集めに努め、何とか十人程度に。半ば強引にでもあった。顧問、指導は、故吉井徹郎先生(吉井芳江先生の御夫君)。とても教員とは思えないダンディで、お二人で外車の通勤。今では考えられないことである。

稽古はと言えば、全員が初段或いは初心者ばかり。加えて、当時の体育館では、卓球、体操、柔道との共用。低い衝立で仕切り使用していたが、卓球や体操の女子の美脚が眩しく、気を取られることもしばしば。それでも何とか様にはなってきた。

二年生になり、生徒会役員選出に当た

り、一人は生徒会長に、一人は会計に就いたのを機に、活動費の補助を得る為、同好会から部への昇格を算段し、ここに目高剣道部が産声を上げることになった。そこで部長選出に当たり、ほんの僅かな経験故に初代部長となったものの、稽古参加者集めに奔走する日々に追われる羽目になった。部昇格の責任の重さと義務感相俟って校内を探し廻っては無理矢理引っ張って来たこともしばしばであった。

ここで響聲を買ったに違いないことを一つ。夏の稽古後、高い金網フェンスの蔭が目隠し替りであることを良いことに、部室裏口から続くプールに素っ裸でドボン。実



初代剣道部のメンバーです。  
前列中央が、顧問の吉井先生  
後列中央が私です。  
武道場の前にて (卒業アルバムより)

は、多くの生徒は目にしていたようだ。当時の女子の寛大な心根に改めて感謝。吉井先生の始業前の早朝の英語デイクティション指導、体育館床板の補修など懐かしい想い出は尽きない。後輩には頼もしい入部者を得、彼らに期待し卒業。その後、専門家の故土居先生の御指導のもと、卒業生の多くに六、七段の高段者を排出するに至っている。

昨年、久方振りにOB会稽古に見学参加したが、在学部員は数人とのこと。かかる状況の下、顧問を担って下さっている先生に感謝したい。

## 籠球部に入って

高校14回生 細田 有二

私は1958年(昭和33年)入学と同時に籠球部に入った。当時目高に講堂はあったが卓球や剣道専門でバスケットボールリングもなかった。バスケットコートは2階建て校舎に挟まれたコート1面分のコンクリート敷きの中庭だった。砂利の散らばったコートを清掃するのが練習前の日課だった。

3年生は練習に出てこず、活動は1年と2年生だけだった。大会には出たが常に初戦で敗退していた。我々が2年生になったころ、東京教育大学(現筑波大学)出身の内田(現船山)恵子先生が体育教師として赴任してこられた。内田先生は教育大バスケットボール部のレギュラー選手だった。すぐさまバスケットボール部の顧問を引き受けてくださった。そして先生の紹介で教育大バスケットボール部の現役選手の長嶋博さんがコーチとして派遣されてきた。

長嶋さんの指導法はフォーメーション戦

略、フットワーク法等がユニークで今までの練習法とは違って効果的だった。チームの力量はみるみる向上していった。夏休みには学校の教室で合宿を組んだ。教室に机を並べ、その上に布団を敷いて寝起きした。食事は女子部員が理科室を使って調理した。練習は緑が丘小学校の体育館を借りた。毎日祐天寺と緑が丘小学校のある自由が丘を往復した。行きはいいが帰りはへとへとだった。



3年女子と内田先生(前列中央)



2年生男女と内田先生



1959年夏合宿にて1・2年生男子

この合宿では多くの才能が発見された。部員一人一人の能力が向上したことはもちろん特定の数人には今まで不完全だった技が自分のものになっていた。ジャンプシュートを確実に決めることができた部員は自信に満ちた。それ以来出ると負けていた目高は4回戦まで勝ち進むようになった。特に3年生を中心にした女子部はキャプテンの川島さんをはじめ実力者がそろい、大会ではブロック決勝まで勝ち進んだ。大会前の練習には我々2年と1年生の男子がかり出され女子の相手となって練習試合を重ねた。

体育館もなくゴム製のボールを使ってコンクリートの上を走り回ったあのころ、バスケットボールがすべてだった。休み時間になるとリングの下に集まりカットインの方法など意見をかわし合い研究を重ねた。3ポイントシュートのルールがまだない時期のことだ。

## 忘れ得ぬ年頭講演

高校15回生 因幡 邦彦

今から約60年前、私は父の転勤に伴い北海道から上京し、転校生として目黒高校に編入しました。担任は岸本先生だったかと思えます。冬休みが過ぎ、最初に登校した昭和36年1月9日は、私にとって生涯忘れられない日となりました。

目黒高校には、新年1月の登校初日に全校生徒を講堂に集め、著名人による「年頭講演」を開催する伝統があったようです。この日、武田忍校長から紹介されたのが前東大総長の矢内原忠雄さんでした。お二人はクリスマスチャンで東大の同窓でした。武田校長は前年から講演を依頼されたが、矢内原さんの体調が悪く1年経って実現しました。

演題は「一人と多数」でした。明日の日本を担う高校生に向かい、民主主義の本質について自らの体験を通じて極めて明快に熱く語られました。その体験とは、矢内原さんが東大(当時は旧制第一高等学校、校

長は新渡戸稲造)学生寮に入寮していた時の出来事です。

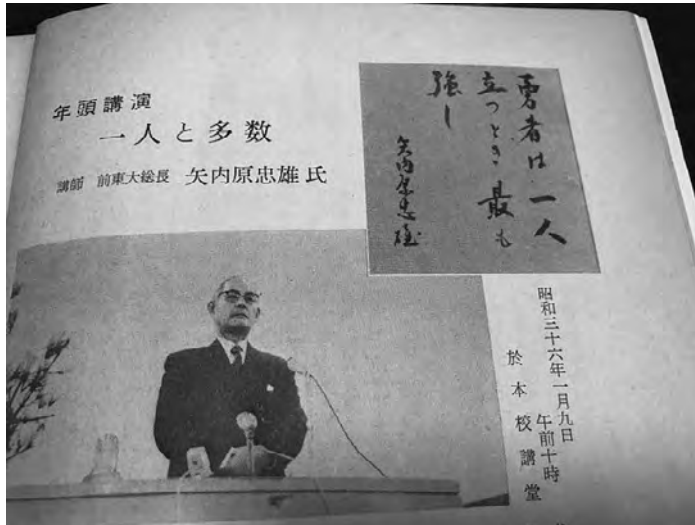
酔っぱらった何十人もの学生が、病弱な中国人留学生に向かって彼を誘い入れようと激しくストームをかけた時に寮室にいた先輩が独り仁王立ちになってストームをやるように説得し追い返した。この先輩の気力と正当な主張で多数の者が撃退された話です。

矢内原さんは、ドイツの文豪シラーの作品に出てくる「勇者は一人立つとき最も強し」という言葉を引用し、真に勇氣ある人間とは、どんな状況下にあっても、独りになってもしっかりと真実を主張出来る者と言うのだと。民主主義は多数決で物事を決めるが、一人の人間が勇氣をもって自分の考えを主張する人間になってこそ本当のデモクラシーが築かれるのだと力説されたのです。

私は先日、赤江達也氏の「矢内原忠雄」(岩波新書)を読み、私たちに講演された頃は癌がかなり進行しており、その年の12月25日に亡くなられたのを知り、命絶える前に何としても将来ある若い高校生にこれだ



けは伝えて置きたかったのだろうと、60年前の矢内原さんの講演の姿を思い出し、熱いものがこみ上げて参りました。



## 目黒高校、兄と私と弟と

高校16回生 福満 早苗 (旧姓 田端)

今から58年前、高校受験が終わって発表までの間、目黒に在学中の兄から校歌を教えてもらっていた私は、たぶん入学式でただ一人、校歌を完璧に歌える新入生でした。歌詞もメロディーも大好きで、いまだに3番まで暗唱しています。

学校までは歩いて15分、駆け足で7分の至近距離に住んでいた私たちは、家の経済的な事情もあり、定期代のかからない高校に通うことが、誰に言われた訳でもないけれど了解事項のようなものでした。好きな校歌が歌えて歩いて通える目黒に合格した私は、始業20分前に家を出て授業を受け、歩いて帰宅するという楽しい高校生活がスタートしたのです。

ところが入学早々、定期券を持って祐天寺駅で乗降する友達の姿を見て、「私には定期券が無い」ことに気づいてしまったのです。そう思った途端、友人と一緒に電車に乗りたくて、授業が早く終わった日には

渋谷まで足を伸ばし、映画を観て電車まで帰って来るというささやかな喜びを見つけ、高校生活を満喫するようになりました。

学校内で兄とのニアミスがあるのではと懸念していましたが、3年生だった兄とは校舎が違うので全く顔を合わせることはありませんでした。が…、とうとう出会ってしまった日が来たのです。それは秋の文化祭のキャンプファイア。全校生徒で踊るフォークダンスで、なんと！ 兄と肩組み、「コロブチカ」を踊る羽目に。始まる前から嫌な予感がして、地面だけを見つめながら踊っていた私の目に、見慣れた靴が近づいて来て…、ただただ早くその曲が終わってくれないかと願っていました。

幸いにも弟は5歳下なのでその心配はなかったのですが、今でも兄弟で会うと思えば話をして笑っています。元気なうちに兄と私と弟で、百周年の母校を訪れてみたいなど思っています。

## 恩師 剣道部顧問

### 土居安夫先生 追想

高校17回生 大久保 康一

（都立目黒高等学校剣道部親睦会会長）

私の高校時代の思い出は、剣道と故土居安夫先生との出会いからです。昭和38年、体育格技の授業が柔道か剣道かの選択が始まり、剣道専門家の指導者として土居先生が都立江東工業高等学校から赴任されました。当時、剣道部は吉井先生が顧問、先輩は白鳥、甲田、長谷川、飯尾、小林等の方々、同級生は河合、横田らの少人数でした。

土居先生が来られてからは急に部員数が増え、20人以上になりました。以後、土居先生が目黒高校を昭和61年に退職される23年の間、多くの剣道部員が育ちました。

昭和40年4月にOB会、「都立目黒高等学校剣道部親睦会」が設立され、今日まで活動しております。土居先生はその後、昭和57年に八段、平成4年に範士の称号を授与されております。OB会では先生のご指導により、大久保、山崎、新倉、小室、三松、

小鹿原、東城、栗屋、堀川の9名が七段を取得しております。

OB会の主な活動は、新年会、6月総会、8月先生の墓参り、11月3日はOB稽古会（平成28年からは久しぶりに母校剣道場にて現役部員も交えての稽古）、また、OBが現役稽古に参加して指導するよう努めております。



平成12年6月11日「五反田ゆうぼうと」にて

剣道の指導方法は、面を付けた稽古で教える体伝、稽古の後の剣道講話で教える口伝、そしてそれを文章にして後世まで伝える書伝から成り立ちます。

土居先生の剣道は、その指導は極めて理論的で、体伝、口伝、書伝の全ての項目が一致しておられた数少ない指導者かと思えます。

土居先生が他界されたのち、先生の剣道の考え方、指導法、業績等をOB会にてまとめさせて頂き、平成19年12月、「土居安夫先生剣道遺稿集」を出版、また、先生の剣道の実際を収録したDVDも作成いたしました。

今日、都立高校でのクラブ活動が、専門家の先生の下で長年にわたり指導を受けることは、困難となっているものと思えます。土居安夫先生のような良き師匠に出会えたことは誠に幸せな事であったと感謝しております。

合掌

# 土居先生のお話

高校18回生 関口 徹

私の目高入学は昭和38年4月です。この年、土居安夫先生も都立江東工業高校から目高に転任されました。先生は剣道七段の専門家として、体育授業、剣道部顧問、高体連の剣道審判長などをされ、私たちを指導する一方、ご自身も昭和57年5月に八段昇段、平成4年5月に剣道範士の称号を授与されました。

土居先生に剣道を学び、私も四段まで昇段することができました。が、この四段審査には苦しい思い出があります。審査は土居先生が役員をされている大田区で行われ、当然先生は檀上から各審査会場を見ておられました。審査の結果、私はめでたく四段に昇段することができました。審査後、私は先生と一緒にタクシーに乗って帰る途中、「今日の審査で受かることができたのは、大田区の土居先生の御威光でしょうか」と話した途端、「関口、タクシーを降りろ。お前は剣道界をばかにしている。」と、

先生は私をタクシーから降りし行ってしまった。破門されたと思い、その後先生に話すことも会うこともできませんでした。

しばらくして、土居先生の奥様から、「四段の免状が届いているから、取りにいらっしゃい。」と電話があり、私は恐る恐る先生のお宅に伺いました。先生は黙って私に免状をくださり、その後、奥様と一緒に祝杯を挙げてくださいました。思えば、目高卒業後も、大学生、社会人となっても、正月3日に剣道仲間と大勢して先生のご自宅に押しかけて、奥様の手料理と美味しいお酒を頂いたことか。

『前後際断』、『心外無別法』、『啐啄同時』、『過去と現在を結んだところに未来がある』、『瞬間、瞬間を懸命に努力する』、『怒らず、驕らず、恐れず、阿ず』などなど、禅や哲学的なお話を、土居先生からはたくさん頂戴しました。

平成15年の剣道部OB新年会において、土居先生は今後の課題として「会を大切にすること」、「剣道と人間形成」の話をされ、この年の8月に先生は逝去されました。

「発して節に中る、これを和という」、先生のお話が耳に残ります。



土居安夫先生剣道遺稿集  
都立目黒高等学校剣道部親睦会  
(平成19年12月発行)

## 目高（めだか）寄席

高校19回生 望月 一人

昭和39年4月、目黒高校に入学した私は「ミュージカル部」というクラブに入りました。このクラブの活動内容は、その名前とは全く別で「落語」を演じることでした。

新入部員には高座名ということで、校名由来の「目高亭〜」とか「目高家〜」という芸名が付けられます。先輩から落語を覚えてもらい必死に覚えませす。また、機会があれば寄席や落語会に出かけ、本職の落語家の噺を聞くなど日々の稽古に励み、幾つもの落語を覚えていったものです。

覚えた落語を、皆さんに聞いてもらう晴れの舞台には、文化祭がありました。公会堂のステージに上がり、落語や大喜利を演じました。また、教室に「目高寄席」の看板を掲げて寄席をしたらえ、部員が代わる代わるに高座に上がり、落語を披露しました。台詞を忘れたり、噺が飛ぶのは当たり前のことです。

もっと上手になりたいということで、放



真ん中が私、望月一人、目高亭竹笑です。  
左は良梅さん、右は花鳥さん

課後に「落語勉強会」を定期的で開催し、落語上達に励みました。その甲斐があつてか、全日制・定時制交歓会の余興に出演を頼まれたり、小・中学校の同窓会などにも、お座敷が掛かりました。

さらに卒業後は、ホールを借りて「竹笑・金魚・八男の三人会」と銘打ち、4年間に都合6回の落語会を開催しました。メン

バーの1人が立川談志の弟子（現名：立川ぜん馬）になり、昭和46年4月をもってこの三人会は幕を閉じました。

それから、四十五年後の、平成28年7月にメンバーを1入れ替えて、竹笑・八男改め花鳥・良梅の3名で懐かしい三人会を復活させることになりました。再スタートした「目高寄席三人会」は毎年7月に「お江戸両国亭」を会場に同世代の卒業生や知人のご贔屓を賜り毎回盛況裏に幕を降ろせていきます。

卒業後五十年以上経っても、観客の前で落語を披露できる充実感が味わえているのも、ひとえに「母校目黒高校あつての話しか（噺家）なあ。」なんて、笑っています。「お後がよろしいようです。」



## 色々ありすぎの・・・

### わが青春の目黒高校

高校19回生 大島 早苗

目黒高校の思い出は沢山あります。中でも、一番の不思議な出来事は私が初代の女性生徒会会長になったことです。これは半ば男子の陰謀ではないかと私は思っているのですが、同期会に集まっている誰に聞いても答えてくれません。他にも力のある男子はもちろんの事、女性でも私なんかよりも勉強面その他多方面に渡って素晴らしい人たちが山盛りでいたのに、です。今でも、かつて無い、青天の霹靂の不思議な出来事です。でもおかげで『長』が付く役職での仕事の仕方のイロハのイ位は、かじった気がします。かなり真剣に取り組んだ半年でした。

女性初代と言えば多分ミュージカル・クラブの中の初めての女性落語家(?)と思います。ちゃんとした高座名も貰っています。目高亭唄梅(バイバイ)と言います。これはグッドバイと読む「良梅」一番弟子な

の Good-bye に一番近いのは [bye-bye] というわけです。当時は目高亭・目黒家・目高家・等というのがあったはずす。

クラブに一番力を入れていたのは写真部。先輩達が写真を焼きに来る放課後は順番待ちが大変なので、早朝6時半頃学校に着いて写真を焼くのです。授業は8時15分開始。それまでに焼けるだけ焼いてしまおうというものです。時効だと思つので、打ち明けますが、裏門を乗り越えて(しかもスカート!!!)学校に入っていました。スナップ写真を買ってもらって、フィルムを買ったり印画紙を買う足しにしました。合宿で公害とは何か、リズムとはどのようなものかなど長時間にわたって議論しました。社会科学の基礎などを知ったのは写真部の先輩のおかげです。目黒川の公害などを組写真で文化祭で発表したり・・・と、話は尽きません。

え? 勉強ですか? 『10』もあつたけど赤点もあつたのは言うまでもありません!!

## 人生の分岐点

高校19回生 三須 秀海

私にとっての人生の分岐点は、やはり嘶家になった事でしょうか。目高時代はミュージカルクラブに所属していました。ここはエレキバンドと落語研究会という変な取り合わせのクラブでした。このメンバーはOBになつても「目高<sup>めだか</sup>寄席」として今も続けています。

子供の頃から父親に連れられて寄席通いをしていて、ついに好きが高じて嘶家になる決心をしました。今は亡き笠間先生に話す、「お前ナ、趣味を仕事にするのは邪道だぞ」と言われましたが、先生は前座の時から亡くなる直前まで私の高座を聞きに来て下さいました。

さて、嘶家になると決めて誰の弟子になるかと考えました。三年の同級に新宿末広亭の席亭の孫北村君がいて、「誰でも紹介してやるよ」と言われていましたが、当時若手で一番好きだった立川談志師匠に弟子入りしました。師匠と弟子というのは入

門してみなければわからないのです。波長が合えば良いのですが、中には反りが合わない場合があります。幸い私はかなり気に入られた様でした。



(株)ミュージックタイトから出た (CD4 枚組)

それから五年の前座修行、六年の二つ目時代を経て十一年で真打に昇進し、六代目立川ぜん馬を襲名致しました。若い頃はTV番組の司会や大喜利もやりましたが、この十五、六年は古典落語一本に絞って独演会を中心に活動しています。日本の古くから伝わる文化、古典芸能を次の時代の人達に広く知ってもらおうべく、今年古稀を迎えますがまだまだ頑張るつもりでいます。どうぞ寄席で「立川ぜん馬」の寄席文字を見ましたら、私も同窓生ですヨと声をお掛け下さい。

## 目高を思う……

### 先生方の思い出

高校20回生 新野 京子 (旧姓 江野沢)

目高の三年間で特に心に残る四名の先生について書かせていただきます。

一年の担任の阿部茂木先生は藤色のスーツがよくお似合いになる先生でした。数学のお授業では凜としていて、教師としての基本を教えていただきました。二年、三年の担任の小木曾雅文先生には苦手意識のあった英語を徹底的に鍛えていただきました。

大学入試の時、第一希望の国立に落ちてしまい、一浪したい相談した時、現役で合格している大学に進学するよう勧めてくださいましたのも小木曾先生でした。翌年には想定外のことばかり、何校かの国立の入試が実施されなかったため、先生のアドバイスは貴重でした。

古文を教えていただいた久富哲夫先生は、芭蕉の研究者でもあり、西行や李白のことを授業の時に言及され、大学の講義を

聞いているような気がしたものです。日本の古典の奥深さ、和歌や俳句の鑑賞の仕方を授業を通して学びました。久富先生のお授業を聞き、同期の友人が結成した「片雲の会」という文学・史跡の会に参加させてもらい、隅田川沿いの史跡や樋口一葉の記念館へ行ったことを時々思い出します。

最後に、二十一期生の担任をしていた、母である江野沢淑子について書かせていただきます。母は二十一期生の皆さんと過ごした頃を懐かしそうによく語っていました。体育祭の時、クラスで衣装をして、昭憲皇太后の衣装をしてとても楽しかったこと、音楽選択の皆さんの歌の素晴らしかったことやホームルームでのことが印象に残っていたようです。

そのクラスの方達と「二十世紀にヒマラヤ杉の下で会いましょう」と約束をしたのですが、二十一世紀を待たずに七十五才で逝ってしまいました。生徒と向き合う姿勢を示してくれた点で、母も目高の恩師の一人です。三年間を思い出すと、初心に返る気がします。

## バスケット部の思い出

高校20回生 戸田 修

私が目高を訪れたのは、小学6年生の時に、母に連れられて兄のバスケットの試合を見に行った時です。当時（1962年）、バスケットコートは中庭にあり、2階廊下から見る事ができました。バスケットの試合を見るのは初めてで、その時の兄のユニホーム姿にあこがれ、私も入学と同時にバスケット部に入りました。

目高には、体育館がなく雨が降ると次の日が大変で、コート整備から始めます。夏の炎天下での練習は、今、思うと、熱中症になりながら練習していたのかもしれない。

一番思い出に残っているのは、都立文京高校との試合（会場は成城学園）で、延長戦に入りました。その時です。会場にいた、あの可愛い成城学園女子バスケット部員から、メグロコールが起きたのです。メグロ、メグロ、メグロと。他校の生徒から応援されたのは初めてでしたので、すごく嬉し

かったのを覚えています。試合は負けました。バスケット部のおかげで楽しい高校生生活を過ごすことができました。

バスケット部は結束が強く、OB会には74歳を先頭に毎回60人位、出席します。

私は69歳、まだまだ元気で頑張っています。



文化祭時の深沢高校招待試合  
目高4番が私です  
体育館がなく外での試合です

## 目黒高校の思い出

高校21回生 安蔵 睦子（旧姓 衛藤）

私たち（夫の雅人と私）が入学したのは、1966年4月です。あれから53年が経ちます。

入学式の日、私は案内係の上級生（後で江野沢先生のお嬢さんと知る）に鉄筋校舎の隣の古い木造校舎の教室に案内されました。控え室かと思ったら、そこが1年7組の教室でした。担任の先生（佐多先生）が現れ、これから1年間過ごす教室だと知らされました。今思えばタイムスリップしたような教室でした。

数学の岩崎先生の時間だったと思います。突然天井裏に住みついていた鳩のふんが積もりすぎて重くなり、天井が抜け落ち、教室中を鳩がバタバタ飛び廻っていました。ビックリ大事件でした。

2年生になると鉄筋校舎になりホッとしました。剣道部の土居先生が担任でした。平和なクラスでした。

3年生の時は3組で芸術系志望の人達が

多く、担任は江野沢先生でした。このクラスは後に声楽家になった方、美大に行かれた方、劇団に入り女優になった方などそれぞれの分野で活躍する個性豊かな人達の集まりでした。時々他のクラスから抜け出して3組の授業に参加している人もいたようです。

毎年、伊藤操先生を囲む会や3年3組有志の会などがありますが、それぞれのグループで同窓会があるかもしれませんね。

夫が山岳部だったこともあり、顧問の奥山先生ご夫妻に仲人をお願いして、代々木八幡神社で式をあげました。28年程前、先生は町田から念願の安曇野に転居され、私たちは毎年北アルプスの山々に登り、帰りは先生のお宅に寄って語らいの一時を過ごしました。昨年1月、先生は92歳で旅立られました。

時代は移り変わっていきますが、「目黒高校時代の友は一生の友となる」という方も沢山いることと思います。その頃の友達が同じに年を重ねていくのが何だか嬉しく思います。

## ありがとう早春の会!

高校21回生 オペラ歌手 池田 直樹

私の都立目黒高校の思い出は合唱部の思い出です。高2の夏に鹿児島島の私立ラ・サール高校から転校して来たのですが、その年、目黒高は、NHKの合唱コンクールで全国1位の栄冠に輝いていました。そのことは知らずに入学し、女性団員(副部長)の優しい声の電話での誘いを受け入部し、数日後の夏休みの菅平合宿にも参加し、音楽の織田久雄先生との運命的な出会いがあったのです。先生に薦められ2年の冬から音楽の受験準備を始め、現役で東京芸術大学に入学、首席で卒業し、NHK交響楽団の年末の第九独唱や、二期会オペラ劇場や、新国立オペラ劇場からの出演依頼が続き、重要な役で多くの公演に参加することになったのです。織田先生は、いまでもとてもお元気で、毎年、正月のフランス料理屋での、「早春の会」の新年会にお出でになられ、力強いメッセージを頂いています。織田先生は8年間だけの目黒高校勤務でし

たが、その8期の合唱部は、いまでも「早春の会・合唱団」として有志で構成され、毎年、目黒パーシモンの大ホールでの定期演奏会までも実現しています。魂の震える演奏を聴かせて貰っています。私は、織田先生に声楽を勉強する道筋を作って頂き、東京芸術大学の名誉教授・中山悌一先生の門下に入ることが出来るよう、私の最初の声楽先生を選んで下さいました。千葉大の教授・小島琢磨先生でした。織田先生の筋書きどりに、高3の夏、小島先生は中山悌一先生に私を託して下さい、門下生となったのです。大学院を含む7年間、中山先生の許で学びました。その後、文化庁芸術家派遣制度により、ドイツ・ミュンヘンで、世界的名歌手ハンス・ホッター先生のご指導に恵まれました。このような著大な素晴らしい演奏家の指導を受ける幸運に恵まれたのですが、織田先生に「叩き込まれた音楽」これ





こそが、私の一番の財産であり、演奏の拠り所です。音楽とはなんだ？ 演奏とはなんだ？ いい演奏とはなんだ？ 一流とはなんだ？ これらの難しい答えが、高2の鹿児島から出て来たばかりの田舎者の頭に叩き込まれました。鹿児島の高校でも男性合唱団で歌っていましたが、それは同好会レベル！ 織田先生の音楽的要求は、プロの演奏家に要求するレベルでした。私の音楽人生は、織田久雄先生により始まり、現在も、幸せな演奏家生活を続けています。もう68才です。ありがとうございます！ ありがとうございます！ ありがとうございます！ 百周年おめでとうございます。



愛の妙薬 ドゥルカマール



素顔の私です

## 山岳部の思い出

高校21回生 安蔵 雅人

今、私は山岳部で登った山々の写真等に目を通しています。山岳部が私の高校生活の全てでした。目黒高校山岳部は当時かなり高度な技術があり、難しい山々を走破していました。卒業したOB連中はそれぞれの大学山岳部や山岳会に所属し、技術と経験で高校の活動に参加してくれていたからです。さらに顧問の奥山先生は多くの山を経験していて、危険な場所、体力の度合等、高校生にとっての限界を考慮して下さいました。

一年生の時の夏合宿は、北アルプス縦走、薬師岳から三俣蓮華、槍と穂高の八日間でした。しかし、その日程と菅平めぐろ山荘の行事が重なりました。奥山先生は、高校一年生にとっての北アルプスの八日間は貴重で大きな体験となることを強調なさり、私は菅平不参加、夏山合宿をとりましたが、結果は全くその通りでした。一年三人、二年四人、OB二人、奥山先生、坂井



高2、S43年春山合宿、八方尾根

先生が顧問で、連日様々な事が起こりました。冷雨と暴風、槍での落石、雪渓の発達。上高地に下りた時は、人生最大の安堵感を覚えたものです。夏の沢登り合宿、秋山縦走、冬山、春の雪山合宿とあり、週末も山に入っていて、授業中でも頭の中は山の事であっただけでした。



高2、S42年秋山合宿、八ヶ岳



高1、S41年夏山合宿、薬師岳～槍、穂高

二年になると部長を務めさせて頂き、浪崎君がサブリーダーの役をこなしてくれました。夏山縦走は薬師岳から立山、剣でしたが、様々な事件があり、よく補助してくれました。顧問とOBは付添いであり、リーダーが判断決定を出さなくてはなりません。落石事故や発熱、登高不能など様々ありました。最終日は阿曾原から危険な谷沿いの細い道を一日歩かねばなりません。この時奥山先生は驚くことをなさいました。電力会社の職員に話をつけ、トロッコのトンネルを歩くことに目をつむらせたのです。谷底に落ちて死ぬかもしれない道ではなく、トンネル内の線路の二時間だけやき平駅に下り立ちました。その時の一年生二人は現在でも登山やバードウォッチングに勤しんでいます。

## 三つの合宿

高校21回生 石田 三喜夫

私は母校剣道部の三つの合宿が、強く印象に残っています。

入学後の身体検査で、土居先生の「君は座高が高く剣道向き」の一言で入部してしまい、初めての夏合宿地は湯河原、都立江東工業高校との合同合宿でした。参加されたOBの方が元立ちとなった掛かり稽古では、やっと目高の先輩に当たった際には、ほっとした記憶がございます。当時は江東工業の部員も多く、合同合宿にされたものと思います。借用した小学校の体育館が古かったせいか、午前中の稽古で床のあちこちが抜けて、午後の修理に時間が経つのを人一倍喜んでいました。

大学入学後に参加した合宿は湯田中でした。現役練習後に先生とOBの稽古があり、生徒就寝後はお酒を持ち込んでの反省会。酒も剣道も初心者の私にはきつい合宿でしたが、高校卒業時に、「先輩に頭を叩かせて貰ったのだから、OBになっても参加

するように」と言われた約束を守りました。この合宿に参加したことにより、その後も先生のご指導のもと、生涯剣道へと繋がったものと思います。

高校部員は三年間で入れ替わりますが、段々と目高剣道部も強くなり、昭和四十七年には関東大会に出場するまでになりました。

この年、土居先生は関東大会を目指してか、初の春合宿を戸倉上山田で実施、OBにも参加が求められました。合宿は試合中



S41年夏合宿、朝めし前のランニング

心、現役部員とOBが何組かに分けられてのトーナメント形式、敗者は降格。私も大生としてのプライドを懸け、最後は何番目の組で終わったか、今は楽しい思い出となっています。

土居先生は平成十五年八月に亡くなられましたが、ご提案のもとにより設立された剣道部親睦会(OB会)は五十周年を超え、私は今も先輩、後輩らに頭を叩かれております。



S42年湯田中夏合宿、練習試合の一コマ

# ラスト・ラン

高校21回生 横山 憲一

逝く者は斯くの如きか、昼夜を舍かず  
(論語) 昭和四十一(1966)年。

ぼくは都立目黒高等学校の一年生となった。多くの知友を得たが、その中に東がいた。テニス部に入部した彼は、背が高く、日に焼けた、絵に描いたような好漢だった。

かたやぼくは陸上競技部、文芸部、ミュージカルクラブを掛持ちする生徒だった。

なぜ彼と親しくなったのか？

それは菅平の一年生の合宿のことだ。東との「ごほんおかわり」競争。もちろん、そんなプログラムがあった訳ではないが、結果として彼を下したということだ。

一年の体育大会の長距離種目は、バスケット部とサッカー部がトップ争いを競い、陸上部は見る影もなかった。コーチも仲間もいなかった。自分でメニューを組み立てなければならなかった。



二年生、修学旅行は東北と関西に別れた。京都の昼飯の弁当箱を東と池にひたして小魚にシェアしている写真が残っている。

二年の体育大会は駒沢での記録会だった。

千五百、三千と心地よいリズムの中で一

位になることができた。

さらにマラソン大会もトップになった。

こうして高校二年は終わり、昭和四十三年、最終学年を迎えた。

十二月三十一日から元旦にかけて、NHKに程近いグラウンドにぼくらはいた。明治神宮へ初詣に行こうと五、六人のメンバーが集まった。時間があつたので、千五百を走ろうと誰かが提案した。そしてぼくはぶつちぎりで勝った。

「相変わらず速な」と、ぶつ倒れた東が言った。こうして、高校生活のラスト・ランは終わった。

三月半ば、爆弾低気圧が太平洋沿岸を通過し、丹沢登山中の東が不帰の客となった。



## 入学時の木造校舎って…

高校21回生 志村 明子 (旧姓 鳥島)

創立百周年、おめでとございます。

私は53年前の入学ですが、初めて見た時の3階建の校舎の立派さと、そのワクワク感が見事に打ち砕かれた一年間。一年七組の教室は新校舎に隣接した木造総2階建の旧校舎でした。窓は山の分校のようで、木製の窓枠から隙間風がはいり、その上新校舎はガスストーブに対して、コークスを入れるるだるまストーブでした。ある日、カーテンにストーブの火が燃え移り、授業中だった俳優山本学<sup>シ</sup>似の現国の先生がビックリなさって慌てふためいていらっしやいましたが、私達生徒はただ座って見るだけでした。教室には消火器はなかったのですが、ボヤですんだのだと思います。

また、旧校舎にはトイレがなく新校舎に掛る橋(?)を渡って行くのです。私達は傷だらけの木製の机に対して、現代的なスチール製の机が並んだ教室を横目で見ながらトイレに行くのです。しかし、トイレ

掃除はしなくて良かったので、そこはラッキーでした。

ベニア板の様な薄っぺらの外壁には天井裏に通じる大きな穴が開いており、そこにネズミと鳩が住み着いていました。授業中、ネズミの走り回る音やチュウチュウ鳴き声、鳩がポッポ、ポッポと出入りする音が響き渡り、そんな時私達は顔を見合わせて笑ったものです。

数年前の会報に、「これは何でしょう？」という写真があり、新旧校舎を結んでいた渡り橋が、旧校舎が取り壊されて、新校舎側に組み込まれて残った部分の写真でした。旧校舎の奥には、うどんや定食が食べられる食堂、書道の教室、茶道の畳の教室などのある建物がありました。まだ建っているのでしょうか？ 楽しかった目黒高校生時代、今も心の財産です。

## 長澤力先生との出会い

高校22回生 安養寺 重樹

目黒高校に入学して長澤先生にお会いしたのが、私の人生の分岐点になったと確信しています。

小さい頃から歴史に興味があり、偉人伝や歴史物の本を読むのが好きでした。漠然と、将来は歴史を教える先生になれるといいなあと思っていたものです。その思いがはっきりとしてきたのが、長澤先生の全力の授業に触れ、憧れたからです。

長澤先生の授業は厳格な雰囲気があります。でも、内容はわかりやすく、先生独自に作成されたプリントは要点が整理されていて、大学受験でも大いに役立ちました。3年最後の授業では、「人を好うる歌」(妻をめとらば)を熱唱されたのが忘れられない出来事です。

時にはユーモアを交えてお話ししてくださいました。ご自身の子育てのこと、寮歌祭のこと、物事の考え方、生き方など、含蓄のあるものばかりでした。怒る時も全力

でした。

大学に進学して、高校での教育実習を行う時がきました。真っ先に目黒高校にお伺いし、長澤先生にご相談させていただきました。ほっとし、快く受け入れてもらえました。ほっとするとともに嬉しかったのですが、その反面、厳しい授業についていけるかの不安も大きなものでした。

実習期間中は、きめ細かいご指導をしていただきました。どのような気持ちで授業をするのか、下準備はどうするのか、服装や身だしなみにまでもアドバイスをいただきました。

「授業中は席の間を歩いて、大きな声で自信を持って話すこと」は、今でも忘れられない具体的な指導内容です。先生の並々ならぬご尽力のおかげで、未熟な大学生である私も無事に教育実習をやり遂げることができました。

先生は私の人生にとって、羅針盤のような存在でした。先生には、感謝、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

掲載した写真は、3年の東北修学旅行で、集合写真を撮るときに先生に声をかけていただき、隣りに座っての一カット。もう一点は、卒業アルバム用に授業中に隠し撮りしたものです。2点とも宝物として大切にしています。



3年時に東北修学旅行で、金色堂の前で記念の集合写真（左）  
卒業アルバム用に授業中に隠し撮り（右）

## 目黒高校の思い出

高校23回生 新倉 準一

66年の人生の中で僅か3年間の高校生活なのに、何と濃密な時間であった事か。今思い返して深く感じる。その殆どの出来事はクラブ活動に集約されている。

剣道部、何の迷いもなく入部したが想像を超えた厳しさだった。卒業後剣道からは離れた筈だったのに、土居先生とI先輩に呼び戻されて、その後の人生は剣道が大きな部分を占めたことは間違いない。生活の基準が剣道を中心に組み立てられる様なものだった。

そのレールを敷いてくださったのは土居安夫先生と今でも続く先輩方後輩達に他ならない。OB合宿、年越し稽古、OB会杯剣道大会、土居杯剣道大会、普段は剣道から離れているOBも参加できる新年会、数えれば切りなく思い出されることばかり。ある時期は毎月OBの稽古会を開いたこともあった。そのいずれにも土居先生は参加してくださっていた。母校の道場や施設を

開放して下さるばかりでなく、ご自身の時間のすべてを弟子のために使ってくださっていた。その有難さや、大変さに気付くのは、随分後になってからだったように思う。先生のご家庭の事など思いも致さず甘え放題だった。

大学に入った安心感で、弓道部に入ろうかと考えている所へ、I先輩が14号館のラウンジに來いと連絡があり嫌な予感があったのだが、会ってみると案の定土居先生からの呼び出しだった。「洗足の稽古に來るように」。先週、大学剣道部の渡辺師範（土居先生の先輩）に呼ばれ剣道部に入るように言われたのを断ったばかりだった。断れずに洗足へ行ったことから、現在までの生活がすべて決まってしまった感がある。

そして今、自分自身七段まで昇段し変わらず少年指導を後輩達と続けられている。又、もう一方ミュージカル部「目高寄席」も高校生活で現在につながるクラブ活動だった。

最近卒業後48年来の先輩と連絡が取れ、近々再会できそうな。その時集まるメンバーは落語、演劇、剣道等いろいろなジャンル

にまたがる目高の同窓生。三年前に「目高寄席・三人会」が復活。50年近い年月を経て、演じる先輩達の何と上手いことが驚異的。

「小さんま（私の高座名）来年はお前も出るんだよ。」という先輩のご指示に困ってしまったが、やらなきゃならないだろう。

そして今、人々との関係が輻輳して続いている。会えばあの時代に即戻ってしまう関係性が、あの時代の目黒高校の素晴らしさ暖かさだったと思うのである。



1年生の時の昭和 43年夏合宿（信州湯田中にて）

## 不思議な縁

高校23回生 阿島美恵子

臨済宗中興の祖「白隠慧鶴」の再来、現代の白隠と言われた山本玄峰老師、そのお名前を知らない方でも「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」という言葉は聞いたことがあるでしょう。その言葉の生みの親が玄峰老師です。敗戦末期、鈴木貫太郎、吉田茂、等々の指導者たちが日本の針路に悩み苦しんでいた時、高い見識からの教えを請いに老師のもとを訪れました。その時に鈴木貫太郎に送った手紙の中にこの一文があったそうです。また「象徴天皇」も老師の助言から生まれたと言われています。

小学校にあがる頃からお茶を習っていた私は目黒高校で茶道部に入部、指導にいらしていた中川千代子先生に出会いました。先生の義兄が三島の龍澤寺の中川宋淵老師でした。宋淵老師は東京帝大卒業後、突如として出家、その後玄峰老師に師事し多くの弟子を育成する一方で飯田蛇笏に師事、

俳人としても知られています。

私は高校卒業後も中川先生のお宅に通いながらお茶を続けてきました。高校の茶道部の手伝い、特に秋の文化祭に向けての夏休みの稽古の手伝いは楽しい思い出です。浜松にある方広寺での合宿(当時、宋淵老師の兄弟弟子の藤森弘禅老師が方広寺にいらした関係で実現したもの)も経験しまし



昭和 47 年、方広寺合宿

た。朝五時に起床、本堂でのお勤め、禅堂で座禅、そして朝から晩までお茶の稽古に励んだことは大変貴重なそして贅沢な時間でした。

商社に就職し、会社生活も十年が過ぎた頃、異動で副社長の秘書になりました。最初の挨拶で副社長の部屋に入った途端、目に飛び込んだできたのは壁にかかっていた玄峰老師の書でした。思わず「玄峰老師ですぬ」と言葉が出ました。前の秘書は興味がなかったのか、話題にものぼらなかったそうです。そんな些細なことがきっかけになったのかもしれませんが、副社長の秘書の仕事は楽しく会社を辞めた後もお付き合いは続いています。玄峰老師に感謝、感謝です。副社長はこの書をお知り合いのTさんから贈られたそうで、そのTさんが中川先生のご子息のお仲人とわかり、びっくりした思い出があります。

私が長くお茶を続けてこられたのは中川先生の熱心なご指導があったからで、教授者の資格を頂き、いまは自宅で茶道教室を

開いています。そしてお茶を通して多くの方々にご縁を結ぶことが出来ました。

「ご縁を大切に」、玄峰老師や宋淵老師のお軸を眺めながら、そう感じている今日の頃です。



昭和 60 年、茶席で中川先生と



# 「歓喜の歌」歌いました!

高校23回生 平部 正和

（自春の合唱団 団長）

2018年6月1日、第九の日本初演100周年記念コンサートが開催され、なんと私は第九のバリトンのソリストを務めました。早春の合唱団の客演指揮者でもある安藤由布樹さんから、アマチュア音楽愛好家または現役音大生からソリストを募集、オーディションを行うとの話をいただきました。受けるとなればその日までに否が応でもきちんとした練習が必要になるので、現役時代の音楽部顧問の織田久男先生にご報告したら「是非受けなさい。そしてすぐに池田直樹に指導してもらいなさい。」とのアドバイスをいただきました。池田直樹さんは音楽部の2学年先輩で現在二期会の重鎮! その直樹さんの第一声、「大変だよー、本当にやるの?」でした。

最初のレッスンは歌の指導は全く無く、ドイツ語母音の基本やウムラウトの発語の指導、その後はシラーの「歓喜の歌」を

ドイツ語の詩として朗読する練習でした。「ドイツ語の特徴は語感にある。単語の意味を語感で表現出来なければ詩の意味が伝わらない」とのこと。これは本当に難しいことでした。2回目は発声のレッスン。言われた通りにすると力んで閻魔大王のごとくの形相になってしまい、これを普通の顔で出来るようになるまで練習するのだと。3回目と4回目は歌のレッスン。私の悪い癖は歌うときに上半身に力が入りしかも前後左右に動くのです。「動くたびに響きが変わってしまったっていいことは何も無い。真っ直ぐ立つのに必要な所だけ力を入れあとは脱力した状態がベスト。」これも難しく、更にドイツ語の発音だけで精一杯の私は詩の朗読レッスンで教わった語感表現などずっ飛んでしまっています。都合4回のレッスンのお陰で何とか合格することが出来、その後本番までの半年間、更に3回レッスンをさせていただきました。

肝心の私の本番の出来は、自己評価は59点でカーンです。背後には1000人の合唱団、眼前には600人の観客が聴いているステージにソリストとして立つ緊張

感は想像以上で、第4楽章が始まりソロの出番を待っている7分ほどの時間がとてつもなく長く感じ、喉がからからに渴き咳払いも出来ず、「このまま第一声がかすれ声になつたらどうしよう」と思ったほどでした。何とか破綻せず歌い始めることが出来ました。何とか破綻せず歌い始めることが出来ましたがもう少し普段通りのゆつたりとした気持ちで歌いたかったです。

その後も直樹さんにドイツ歌曲やオペラアリアなどを教えていただいております。これからは独唱の勉強を続け、合唱と共に楽しんでいきたいと思っています。



コンサート当日のプログラムより

# バレーとの絆、今も

高校23回生 竹内 浩



メキシコ銀、ミュンヘンで金メダルの木村さん

バレーボールの部活が間違いなく高校生活の中心でした。勉強は好きな科目以外は追い詰められたときにやる程度でした。入学は1968年。その年の秋にメキシコ・オリンピックが開催され、日本の男子バレーボールは銀メダルを獲得しました。7学年上に当たり、卒業後、中央大学からパナソニック(当時松下電器)に進まれた先輩の木村憲治さんがほどなくして、銀メダルを首に掛け目黒高校にやってきました。当時のバレー部顧問は吉川保巳先生でした。木村さんも指導されていたので、きつ

と先生がメダルを持って母校に来てほしいとお願いされたのでしよう。臨時の朝礼だったように記憶しています。木村さんが校庭の朝礼台上りお話しされました。

吉川先生は学生時代に9人制で目覚ましい活躍をされた方でしたし、今度は先輩がオリンピックのメダリストになりました。自分までどこか誇らしくなったような思いで、練習に熱が入りました。

当時、体育館はまだありませんでした。校庭の隅にネットを張り、粘土質の輝きのある固い土の表面が現れるまで、ほうきで丁寧に砂を取り除く作業をして練習を始めるという毎日でした。まだ、中学では9人制、高校に入ると6人制という時代でした。夏のかんかん照りの中、レシーブ練習を続けるのは大変でした。

体育館ができたのは3年生に上がる春休みだったと思います。そこから練習の質が一段と高まり、チームのプレーの精度が上がって、さつきの咲く季節に栃木県での関東大会に出場できました。高校生活のハイライトでした。

私自身はスポーツがますます好きにな

り、大学卒業後は通信社の運動部記者になりました。国際バレーボール連盟のプレス委員となり、日本バレーボール協会の活動もお手伝いしています。2015年から2年間は、会長に就任した木村さんを理事として支えることになりました。こんな巡り合わせもあるんだとの思いでした。



## 今も昔も1年5組

### 51年前は新入生

半世紀前のこと、のちの三年生の秋に高架駅になった祐天寺駅もまだ地上にあった時代のことです。昭和43年に前年からスタートした『学校群制度』の二期生として入学した一年五組のクラスメイトは49名。

そんな我々を待っていてくださったのは高部正先生。この江戸っ子のカラツと気質の先生が『ただ者』でないことはすぐわかりました。生物学を専門とされていた高部先生はNHK高校講座を毎週担当されていました。『担任の先生が毎週テレビ出演！』それは15歳の我々にとってはちょっとした大事件です。先生は最初のホームルームで『この一年五組のルールとして毎月2冊の本を読んで感想文を書こう！』と提案されました。

またあるホームルームでの課題だった『10年後の私への手紙』も印象的でした。のんびりした校風もあって、一年五組での生活はすぐに『住めば都』状態となりました。

このクラスは全員音楽選択、加えて男子は全員柔道選択という構成。その音楽では男女4名でのグループ課題もあり、早朝、昼休みに屋上で練習する姿も印象的でした。菅平の林間学校も楽しく、美しいマドンナ達との想い出もセピア色に輝いています。



いつしか不定期に始まり、そして最近では数年に一度開催されるクラス会には30名近くの出席があり大盛り上がりです。やはり青春時代に時間を共有した仲間ならではの絆は特別なんでしょう。

毎回高部先生もご出席下さり、そのお元氣さ、若々しさに私たちがはっぱをかけられているのも本当に幸せなことです。

よく一年のクラスのクラス会はずらしいと言われますが、この素敵なめぐり合わせに感謝しながら、この先もこの一年五組の仲間が末永く元気に集まれる幸せを感じ続けたいなあと心から願っています。

みんな、ありがとう！

# わたし きんちゃん!

高校23回生 川野 和美 (旧姓 甲)

目黒高校同窓生の皆さま。同窓会のイベントなどでお世話になっていきます、きんちゃんです。お会いすると「いつも元気ね! 明るいわね!」と言われ嬉しい限りですが、私にも悩める青春はあったのです。

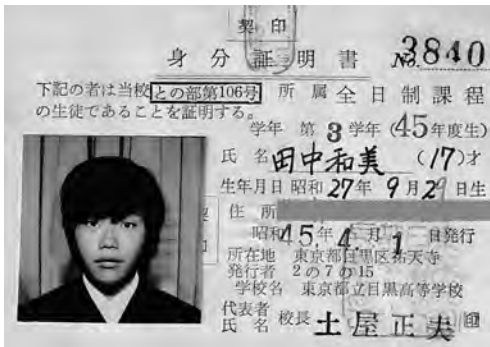
入学してから2週間、クラスの人と話すことができずに悩んでいました。初対面の人に声をかけることができないし、話している輪にも入れず辛い毎日でした。このままではいけないと思い、隣の席にいるMさんに「わたし、きんちゃん!」と必死の思いで言ったのを憶えています。Mさんは「何? 知ってるけど。変な人!」と思ったそうです。この体験で肩の力が抜けたのか、これをきっかけにクラスの人たちと話すことができるようになりました。私の高校生活はこの言葉から始まったのです。最初の一声は大事ですね。

では、私と目黒高校のお話です。まずは校庭の広さにビックリ。「広いな

あ」と驚くと、クラスの人は、「えっ?」と不思議な顔。私の出身中学は50mが校庭を斜めにしてやっとなことれる程度でしたので、目高の校庭でいろんなことが出来るなど期待は膨らんだものです。文化祭でキャンプファイヤーができたのも、校庭が広がったからだと思います。

私たちの代は、都立高校が学校群制になった2年目。周りの人は都立大附属に入りたい、次に広尾。目高にはガツカリしたと言っていた記憶があります。そんな中で私だけは一人喜んでいました。なぜなら目高には落語研究会がある、と聞いていたからです。落

語大好きな私は、入学したら落語好きな仲間と活動できることを楽しみにしていました。そんな時にクラブ説



明会があり、各クラブの先輩が部活の紹介をします。剣道部は女子2名(吉田さん、福留さん)が登場し、凛々しい姿で無駄のない紹介。一目惚れでした。剣道の経験もなく、興味もなかった私が「やってみよう」と思っって入部したら、同じ想いの女子がなんと多いこと。10名を越えていました。

私は剣道部と落語(当時はミュージカル部のなかに落語研究会がありました)に入部し、日々部活に専念したのです。いまでも剣道部、落語部の人たちとは親交を続けています。

縁あって娘も目黒高校でお世話になりました。親子で目高、孫が目高、という話もよく聞いたりします。時代は違っても目高に流れている心には通じるものがある、と実感している毎日です。

同窓生の皆さま。私もイベントごとに皆さまから元気をいただいております。これからも目高という共通のもとに楽しい時間を一緒に過ごせれば幸いに存じます。



## 今、伝えたいこと

高校24回生 橋本 千恵

一昨年と同窓会にて催されたコンサートの前半は、現役目高生吹奏楽部の演奏。演奏する楽しさが溢れる若々しい音色。後半は、私達世代の音楽部OBの合唱。あの頃の音楽への情熱衰えることなく、更に深みを増した演奏でした。世代を超えて、音楽の喜びを共有できる、この学校の出身であることを本当に幸せだと実感したひと時でした。

振り返れば、私が目高に入学したのは、敗戦から四半世紀が過ぎ、社会はより豊かになっていく一方で、大学では学生運動が吹荒れ、高校もその煽りを受けていました。この時期、風紀委員会主導で制服は廃止され、また卒業式は生徒により企画運営されたのです。学生運動が漸く下火となった受験期の冬、「浅間山荘事件」のTV中継を横目に、互いの可否を伝え合ったのも鮮明な記憶です。そんな時代の下で、私達は幼いなりに社会を視る目を養い、時に

は、有志が先生にお願いして、放課後憲法についてのレクチャーを企画したこともありました。社会への疑問を師弟が一緒に語り合えたのも、幸福な時代だったのかも少し残念。

そんな中で忘れられないある男子生徒の言葉があります。文化祭の企画について話し合っている時、意見を求められた彼は、元々寡黙な人だったので、「ええと…、賛成する理由がないから反対します。」と言ったのです！？ 彼を見て皆絶句。私も反対理由が奇異過ぎて哑然としました：が、今思うと、賛成意見が多数派の時、とり敢えず賛成しておこう…という行動に、「ちよっと待って。本当にそう思う？ もう一度考えてみようよ。」という提案になるのではないか…、そう思われてきたのです。

どうですか…、私達の味わったこんな自由で幸福な時代の空気…、それを、あの若い後輩達をみつめながら、ちよっと問うてみたくなったのは、私だけでしょうか。

## つながり

高校24回生 斉藤 能規

高校時代は全く勉強もせず、思い出と言えば日々明け暮れた部活と先輩にしごかれた合宿、毎日と言っているほど部活の帰りに食べていた五本木ベーカリーの揚げクリーム、それとほろ辛い片思いでした。風邪で授業を休んでも、先生に見つかからないように部活はキャプテンとして休まなかったことが唯一、自負できることかなと思います。

そんな勉強しないスポーツ少年は、縁あって今は北陸の富山県高岡市で小さな旅行会社を営んでいます。部活の先輩たちが、八尾おわら風の盆の祭りの見学に来た折に食事に誘っていただき、そのお礼にお祭りをご案内しました。この祭りを上手に観るにはコツがあるので、私の案内はとて喜んでもらいました。この時、これは地元にいる私の役目だと感じたものです。

富山県はユネスコ遺産に登録されている「高岡御車山祭りや城端曳山まつり」、世界

文化遺産の「五箇山の合掌造り集落」はご存知の方も多いと思います。その他にも、風物詩としてテレビでも紹介される春の開通時にできる高さ20mの雪の壁の道路や錦秋の紅葉で有名な3000m級の立山連峰を横断する雄大な立山黒部アルペンルート、世界で最も美しい湾クラブに登録された富山湾の海越しに立山連峰や剣岳の見える雨晴海岸、世界レベルの高岡の金属クラフトや漆器、八尾や五箇山の和紙、井波の彫刻など、加賀百万石ゆかりの世界に誇れる一級品揃いです。

また食文化でも、天然の生簀と言われている富山湾の海の幸、四季折々の山の幸、立山や白山系の七つの一級河川からの上質な水が育む米、酒、発酵食など世界のグルメが認めるものがたくさんあります。

私はこんな素晴らしい地元の魅力を発信する観光大使になるべく、同窓生に喜んでもらいながら地元への貢献ができたらと思います、高校を卒業して四十五年の沈黙を破って一昨年同期会に参加しました。高岡で地元の高いネットワークを使って特別な案内ができます是非富山、高岡に来てくださ

い。

そして全国におられる同窓生の方にも自慢できる住みなれた地元を同窓生に案内していただき、観光大使として都市と地元をつないでいただきたいと思います。



## 土居安夫先生の御指導

高校25回生 小室 憲彦

私にとって目黒高校といえば剣道部、剣道部といえば先輩・後輩・同級生、そして顧問を務めておられた土居安夫先生の御指導が忘れられません。

土居先生には卒業後も平成15年8月1日に亡くなられるまで御指導いただきました。剣道部での三年間は週四日の稽古、春夏の合宿など都立高校としては豊富な稽古量で、私たちの代は東京都新人戦第三位、関東大会出場などの戦績を残すことができました。これもひとえに当時としては先進的な土居先生の御指導のおかげでした。専門家としての土居先生の剣道は立ち姿、動作ともに洗練されて無駄がなく、まるで社交ダンスのようなイメージでした。ただ稽古は厳しく、相当の覚悟を持って並ばなければならず、稽古の後は立っているのがやっとという状態でした。

私自身、週に一回程度の稽古を続けていますが、今でも高校生の頃に土居先生から

教わった事を思い出し、「あの時先生が教えてくれたことはこういうことだったのか」と思い当たることがあります。多分高校生には難しい内容だったのかも知れませんが、懇切丁寧に教えていただいた記憶があります。

その後色々な先生に御指導いただきましたが、土居先生ほど理論的かつ分かり易く教えてくれた先生はいませんでした。今考えば、「そこまで教えちゃっていいの？」という感じです。たとえば腰の備え、間合いの取り方、呼吸法など流派の極意ともいえることを惜しげもなく教えてくださいました。ただ私達弟子の理解力が不足していたために、その頃はなかなか身に付けることができませんでした。呼吸法などは、六十も半ばを迎えようとする最近やっとその重要性に気付きました。「吸う、吐く」の二つを如何に意識して行うか、行き着くところのない課題のようにも思えますが、土居先生の御指導を思い出し、焦らずじつくりと取り組んで行きたいと思えます。

## 都立目黒高校の

### 創立100周年に寄せて

高校26回生 佐藤 栄一

私が目黒高校に入学したのは昭和45年4月で、学園紛争も静まり「三無主義」という言葉が囁かれ、少々虚しさを感じながらもこれから何をすべきかを自問自答しているような時代でした。制服はなく、昼休みは外出して食事をする等、とても自由な雰囲気でもありました。とは言え当時の都立目黒高校は比較的学習熱心な生徒も多く、試験前などは計画を立てて夜遅くまで試験勉強をしていたことを覚えています。

しかし2年生になるとその自由な雰囲気にもまれ、勉強熱心さを失っていく生徒もいました。私もその一人だったと思います。時々将来に不安を感じ、これでは目標の大学に入れなくなるという思いで、試験前には焦って学習していました。そんな中、2年生の倫理では、自由研究をして提出するという授業があり、ルソー、トルス

トイ、ソビエト連邦共和国等について調べ、様々な考察をしてまとめました。偉大な哲学者や文学者について調べながら、自分の人生についての考えを構築させていきました。

結局大学受験は全敗し1年浪人して国立大学に入学し、教職の道に進み、都立高校の教員24年、副校長5年、校長8年、定年退職後再任用を経て、現在都立高校で非常勤教員として経営支援をしています。

初めは大きな可能性を信じて目標を持って進むも、やがて軌道修正を繰り返し、それでも夢をあきらめずに近づくためにもがき前進しました。結果高校の時の夢であった教職の道へ進めたのは、先生方のご指導のもと、友人に恵まれ、互いに考えをぶつけ合い、励まし合ったお蔭だと思っています。

都立目黒高校でのご指導いただいた先生方、共に学んだ多くの友人・仲間にとっても感謝しています。教室に持ち込んだギターで休み時間によくフォークソングを歌っていました。当時の先生方はとても優しく私たちを見守ってくださいました。今にして

思えば、もう少し規律を守るための厳しい指導もあってよかったと思いますが、自由の中で自分を見つめることができた高校生活は、私と多くの仲間の宝物になりました。

定年退職を過ぎ、もう一度高校生に戻りたいとつくづく思う今日この頃です。100年もの間、宝物となる高校生活を作り続けてきた多くの教職員の方々、全校生徒と同窓生に心から感謝申し上げます。



## 金メダリストの帰還

高校26回生 岡田 賢

来年は日本で二度目のオリンピックの年。前回オリンピックには思い出がある方もいらっしやるかも知れません。さて、前回の東京大会の翌々大会のミュンヘン大会には、我が都立目黒の卒業生から金メダリストが生まれているのをご記憶の方も多いでしょう。男子バレーボールの木村憲治選手です。

それは、ミュンヘン大会の興奮さめやらぬその年の母校文化祭の時のことでした。当時は、校内の展示とは別に世田谷区民会館やら目黒区民会館などで演目の行事がありました。学外ということで警備の係があり、私の所属する剣道部がその任に当たっていました。会場の入り口とかでガードマンよろしく立っているわけです。交代で中の様子を窺いながらそれなりに楽しんでいると、何やらサプライズゲストが来ている旨アナウンスがあり、颯爽と木村選手が登壇されました。生徒が大盛り上がりの中で

スピーチされ、万雷の拍手の中を降壇されました。

しばらくして木村氏がロビーに出て来られ、椅子に腰掛けたその胸には金メダルがしっかりと掛けられていました。当時、金メダルなど見たこともなかった私は、後からジーンツと物欲しげに見つめていたのでした。剣道で鍛えた私の殺気(?)を感じたのか、おもむろに振り返った木村選手はニッコリ笑いながら「これ触ってもいいよ」とやさしく言ってくれたのです。

はしたなく触ってはいけないと思いつつ、「ありがとうございます。」と言うや否や私は何度も何度もメダルに触ったのでした。それに気づいた周りの生徒らも集まって来て、我先にとタッチを始め、人だかりが出来たのでした。

あれから40年以上が経ち記憶も薄れがちですが、アイドルやスポーツ選手に群がるフアンの姿を見ると、懐かわしいと思うどころか、「人のことは言えない」と思ってしまうのです。現役の高校生の皆さんにもオリンピックに因んで何か良い思い出ができればと願ってしまいます。



## 楽しかった都立目黒高校

高校27回生 篠永 玄一郎

都立目黒高等学校100周年おめでとう  
ございます。

昭和47年、1972年入学の27回期生です。この年は、2月札幌オリンピック、5月沖縄返還、7月田中角栄内閣発足。47年前になるのだなあと懐かしい思い出が蘇ります。

入学試験は、郡制度、23郡（目黒・広尾・都立大附属）で合格後、どの高校かは選べなかったが、23郡の他の高校に進学した友人達に聞くと、他校より目黒高校で自由のびのびと高校生活を楽しく送れて良かったです。

入学の時、私服OK、昼食は外出OKと自由な高校と期待していましたので、ブレザーで入学式に出席したら、男子はほとんどが学生服でした。しかし、先輩を見習い私服でくる生徒が増えて大学っぽくなり、昼は、早弁をして、喫茶店に行く人も出てきました。

修学旅行は京都、グループで観光計画を作り、自由な観光でした。夜、京都のスナック見学をした人もいました。

今はなき、菅平めぐろ山荘で朝の味噌汁に米粒台の幼虫が入っているのが見つかり、大騒ぎ。夜、部屋で禁止事項の飲み物を無理して飲んだ？ トイレを汚した人がいましたね。

一番怒られたのは、教室の後ろで煙幕焚いて「火事だ」で、英語の岩佐先生が、泡を吹いて腰が抜けてしまった！ 英語の教員室に呼ばれ先生方に長い時間叱られた事かな。

学園祭では、3年の時に「太陽にほえろ！」の映画を提案し、監督・脚本・主演したのが、楽しかったです。自己満足(笑)

我が学年は、男子181名、女子189名で8クラスでした。卒業後、同窓生同士で結婚した方が12組もあります。そのうちの1組は高校1年生から付き合ってたのゴールイン。素晴らしいカップルですね。

山の手の上品で自由な都立高校のイメージは、今でも受け継がれていると聞いてます。自慢できる都立目黒高校が永遠に続くように願っております。

## 春合宿・三宅島合宿の思い出

高校27回生 小鹿原 賢

剣道部を指導する土居安夫先生については、私の中学校時代の剣道をアドバイスして頂いた巣鴨学園剣道部師範の佐々木先生から「良い学校に入ったな。土居先生の下で剣道を習えば間違いないぞ。」とお話をいただけていました。当時の剣道部は、東京都の剣道強豪校の一角に君臨する都立高校の雄でありました。

剣道部は、昭和47年4月29日に行われた東京都予選で関東大会の出場権を得ました。先輩方が全校朝会ですらりと並び挨拶をしました。その雄姿を見て入学したばかりの私は先輩たちのように大会で活躍できるような実力を身に付けたいと思うようになりました。

先輩たちが春合宿を行って力を付けたと知って、私たちもと、1年生の春休みに先生に頼んで春合宿が計画されることになりました。しかし、驚いたのは合宿地が三宅島であったことです。まさか島とは…。同



2019年5月 コロンビア南米剣道大会：ただ今、JICAにてアルゼンチンの剣道を指導しています。背広を着ているのが私です。

級生たちと「これでは、逃げるにも逃げ出せないなあ。」と話したのを思い出します。卒業式後の3年生の先輩方が基立ちとなり稽古は大変厳しいものでした。打つても打つてもいなされ倒される掛り稽古の連続で体力の限界まで稽古しました。私は稽古がつらくて、面の中で涙を流していました。

厳しい合宿の稽古を乗り越え、ようやく帰路の船に乗ることができた私たちに、3年生の先輩方から「よく頑張ったな」と言葉掛けて頂きました。先生からは「主将ご苦労さん。」とビタミン剤を頂いたの思い出します。空と海の青さ・春の温かい風も疲れを癒してくれました。迎える4月29日、関東大会東京都予選が早稲田記念会堂で行われました。我が目黒高校は残念ながら出場権を得るベスト8には届きませんでした。しかし、仲間とともに合宿を乗り越え培われた友情や絆という宝物を得ることができました。汗と涙の思い出です。

## 軟式テニス部の思い出

高校28回生 石原 恵(旧姓永田)

♪あなたを待つのにテニスコート♪天地真理さんが歌ったヒット曲「恋する夏の日」。1970年代に目黒軟式テニス部に所属していた方ならば、その思い出の背景に流れる音楽と言えばこの曲ではないかと思えます。

校庭とは別に学芸大学駅から歩く事10分。小野田セメントのテニスコートを私は使わせて頂いていました。私は、教室での思い出よりもその小野田コートの思い出の方が記憶の中に鮮明で、いかに勉強をしていなかったかが分かるというものです。その割には、テニスの試合の成績もふるわず。

しかし、何しろとんでもなく笑い合った部活動でした。私たちの代は、『エースをねらえ!』の影響で、テニス部は大人気。1年生の時、女子は40名を超える有様で、1年の夏休みはほぼ毎日のように朝から夕方暗くなるまでテニスコートを囲み球拾いば

かり。

何がそんなに楽しかったのか、笑っている、「ぼーとしてんじゃねー」と、チョコちゃんばりに激を飛ばすOB。夏休みは蝉の鳴き声と「めぐろーファイト。ファイト。ファイト」と言うかけ声の中、苦しい事はすっかり忘れ、大きなやかんから麦茶をみんなでやつの事でありついた休憩時間でした。学校内とは別の場所での部活は、もしかしたら先輩後輩OB同期の絆を深めてくれたのかもしれない。

卒業して40年以上が経つ今、2、3年置きにOB会は続いています。上は70歳代から50歳前後の各代で構成され、やはり当時から変わらず笑いがはじけます。その中心が、佐藤充彦先生です。80歳を超えて尚新しい事に前向きで、私たちの目標です。佐藤先生は、私の2年、3年の担任であり、英語の先生、テニス部顧問。軟弱な私が毎夏そばかすだらけに遅しく成っていく姿をずっと見て下さっていると思うと、両親亡き今、大切な存在です。そして、笑ってばかりいた私たちにも様々な試練があったの今日ですが、個人的に支えて下さって

いる先輩、同期があの日高軟式テニス部の皆様です。私は、あの時代に人生の大切な財産を得たと感謝の気持ちで一杯です。



2016年6月 軟式テニス部OB会 佐藤先生をはじめ41名集合

## 都立目黒高校をおもっ

高校33回生 後藤 ゆうこ(旧姓大野)

都立目黒高校創立100周年、おめでとうございます。母校が100年という長い歴史を刻んだことは、とても誇らしく喜ばしいことです。わたしの高校時代は受験勉強や宿題などのストレスと戦いながら、はりつめた毎日をごしてたと記憶しています。だからこそ心をわかち合えるお友達達の存在は、大切な宝ものでした。

一年生で一緒のクラスだったCさんとは部活の茶道部で週に一回楽しくお稽古をして、いろんなことを語り合いました。3年間同じクラスで何でもお話しすることができたRさん、思春期の不安定な心を優しい色に変えることができたのは、あなたのようなお友達との時間のおかげです。そして2年間一緒だったHくんやWくん、いつも話しかけてくれてどうもありがとう。おかげさまで、わたし自身のアイデンティティーや個性が救われました。



わたしの母は、同じく都立目黒高校で勉強をし、お友達にも恵まれました。母の高校時代は戦後間もない頃で、わたしたちの頃のような物質的豊かさはなかったかわりに、心はとても純粹で潤っていたようです。たくさんのお話しを聞かされたものです。母はいつも明るく行動的、わたしにとっては、反面鏡を含めてかけがえのないロールモデルです。いつも前向き、ポジティブという生き方は親子同じです。

やはり、目黒という土地、先生方や関わっている人々、コミュニティがわたしたちがいい環境をつくってそのように育ててくれたのだと実感します。親子2代でお世話になった高校に、これからもますます、多くの生徒さんの学びと出会いの場所であってほしいと願っています。

学校とは、学びの場所であると同時に人と人が交流し、磨き合い、感動をともにする場所なのだと思えます。わたしの娘はちょうど今、高校3年生で、勉強と友達との社交で忙しい毎日過ごしています。未来をしっかりと築いてほしいと心から思います。

最後に、2年間担任をしてくださった笠倉先生の訃報を去年の会報で知りました。先生は、しらせ世代のわたしたちをいつも元気づけて、気持ちを高めてくださる頼もしいお父さんみたいな方でした。先生、わたしたちも大人に成長し、あの頃の先生のように若者を元気づける立場にかわりました。どうかわたしたちのことを優しい笑顔で見守っていてください。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



母と姉と一緒に

## 祐天寺のグラウンドで

高校38回生 中林 圭

昭和58年4月、私は東京都立目黒高校の門を叩きました。そこで私は入学式当日より野球部の先輩方からの執拗な勧誘を受けます。小学1年から始めた野球も中学の3年間は遠ざかっており、高校でも再開するつもりは毛頭ありませんでした。ただ先輩方の野球に対する熱い思い、部への愛情に絆され、程なく入部を決めることになりました（決して美しい先輩マネージャーを追いかけて入部したわけではありません 笑）。ここから部の引退まで、2年半に渡る怒涛の高校野球生活が始まりました。

時を進めて平成2年の年明け早々、その時明治大学軟式野球部に所属、4月から最髙学年となる私へチーム主将（同期）から電話が入ります。

「春のシーズン、ポジションの大幅な変更を考えている。伸び盛りの佐藤（当時新3年）をセカンドに起用したい。俺がショートに回るので、中林にはサードを守ってほ





軟式野球の公式戦：場所は上井草グラウンド（杉並区）

しい。」

前期秋のシーズンに東京六大学リーグで優勝し東日本大会もベスト4で終えた現チーム、その中で主戦として活躍していた自分にコンバートは必要ない、そんな私の反論は一蹴されます。

「変わらないのは退化。他チームは打倒明治でやってくる。攻めて前へ進むしか

ないんだ。」

当時慢性的な肩の不安を抱えていた私には、セカンドからサードへのコンバートは負担の大きなものでした。ただ過去の実績に安住し先へ進むことを忘れていた私にとって、主将の考えは衝撃であり自分を恥じたものです。即座に返答しました。

「わかった。準備しておくよ。」

結果は春季キャンプからの酷使がたたりの案の定オープン戦中盤で右肩を故障、そのまま公式戦出場は叶わず、最後のシーズンを前に私の選手生命はそこでピリオドを打ちます。

ただこの決断に今も後悔はありません。それは祐天寺のグラウンドで叩き込まれた



サードを守り、背番号5が私です。

「前へ出たのエラー」「見逃しではなく空振り三振」への強い思いがあるからです。同じ失敗でも気持ちを出したプレーをする、それが目高野球部での教えだったと記憶しています。最後は残念な終わり方だったかもしれませんが、そんな前に出た失敗は今も懐かしい思い出です。そしてまた社会人となった現在も、自身の判断基準として確りと心に留め置いています。

野球との再会、そして後悔のない引退をアシストしてくれた目高野球部に感謝しつつ、筆を置きたいと思います。母校創立百周年への祝意を込めて。

# 剣道部の繋がりと洗足

## 少年剣道教室について

高校40回生 飯島 靖彦

私の入学は昭和60年4月です。剣道部は、部室棟3階で着替え、旧武道場で稽古をしていました。顧問の土居安夫先生には、幸運にも先生が教員最後の年に出会う縁に恵まれました。土居先生は、小・中学生の健全な育成を目的とした剣道教室「洗足少年剣道教室」(以下「洗足」という。)を大田区内に昭和44年に創立して指導されていました。大学進学後は、その洗足でお手伝いをさせていただいたお蔭で、私は剣道を続けることができました。

平成15年に土居先生が他界された後は、土居先生とともに剣道部の顧問をされていた下田眞己先生(国語科)が洗足を引き継がれましたが、下田先生も平成27年に他界されました。その後は私が土居先生の遺志を引き継ぎ、洗足の指導責任者となり、新倉・小鹿原・堀川の先輩方を中心に、大久保・高橋俊・細井・大浦の先輩・同期の協

力を得ながら指導しています。

洗足の教室旗には、目黒高校剣道部旗と同じ「和」の文字が揮毫されています。今年、洗足は50周年、目黒高校は100周年の節目を迎え、月日の流れを感じるところです。

「和」という課題・テーマを土居先生が組織の中に設定したのは、教室や剣道部員が困難を乗り越えながらも永続・発展してい



少年剣道教室

くための意味・意図があったのではと感じています。土居先生が創設された剣道教室は、これまで多くの先輩・後輩 関口・山田・石田・藤野・水口・段原・中郷・山崎・進藤・仲田・小室・岡田・田中・伊東・千葉・東城・宮川・田山・鎌倉・高橋裕・石渡・松下・徳嵩・馬淵・渡辺・武田・葛)が指導員や大会・稽古に関わり、教室を支えてくださいました。これからも先輩・同期・後輩の協力をいただきながら、洗足という剣道教室を大切に守り続けて行きたいと思っています。



## 水泳部最後の男子副部長

高校46回生 松本 弘忠

平成3年入学、1年目の都大会では、入場順が2番目で、多くの場所取りを経験。

4×100mフリーリレー、私は第一泳者で、左隣に都立青山高校。3校戦、5校合同記録会でも勝てなかった青山に都大会で勝利。また、リレーの準備中に更衣室で、都立X高校の女子更衣室覗き事件を目撃、衝撃的な都大会であった。

翌年、後輩が女子50m自由形で、5位入賞という快挙を達成。練習メニューを考えていた一人として、水泳に対する考え方が合っていた事を証明してくれたし、中々成り手のいない水泳部顧問を永く務めていただいた前川利博先生に恩返しが出来て、とても嬉しかった。中学3年の時、東京体育館が現在の姿になり、当時の鈴木都知事、前畑さん、地元の代表として都立青山高校水泳部マネージャーさんと共に、テープカットした思い出深いプールで起こった奇跡を忘れる事は無いだろう。



当時のスイミングキャップとジャージです。

だが、僕らの代が3年生の時の部長選挙で、歴代初の女子部長を許可した事によりその後のOB・OG会が機能しなくなった事、僕が最後の男子副部長になってしまった事、16校戦に参加出来なかった事などを水泳部の先輩方に謝らなくてはならない、苦しい思い出。

一昨年(2017年)、ANN(オールナイトニッポン)木曜2部を偶々つけたら、目高の後輩、「SUPER BEAVER」のボーカル、渋谷龍太君がパーソナリティを勤めていた。現役当時、ANN木曜2部を担当していた、あの「ましゅ」(福山雅治)の時間に出会った、「SUPER BEAVER」の「正攻法」は素敵だった。



# 記憶の中の匂い

高校55回生

佐藤

裕太

記憶は匂いと密接に結びつく。

そして、その記憶は人によって変わる。

例えば、汐の匂いを嗅いだ時、

夏休みの家族旅行を思い出す人もいれば、初恋の人と行った夕暮れの海を思い出す人もいるだろう。

さて、なぜこんな書き出しをしたのかというと、今回、この文章を書くにあたって色々と想いを巡らせていたら、自分が何かの匂いを嗅いだ時の記憶のその大体が、自分が現役の目高生だった頃の記憶と結びついていることに気が付いたからだ。

そう、桜の季節の匂いは、ぶかぶかの推奨服を着て、少し緊張しながら臨んだ目高の入学式を思い出させるし、雪の季節の匂いを嗅げば、かじかむ手を擦りながら自転

車をこいだ、通学中の駒沢通りを思い出す。

揚げ物の匂いは、みよし通りの惣菜屋のあの陳列棚を、汗とカビの匂いは、サッカー部の部室で大笑いしたあの冗談を、土の匂いは、大声を張って青春を駆けぬけたあの応援団を、公園を抜ける風の匂いは、飽きることなく語り合ったあの夢を。

ありとあらゆる匂いが、かけがえのない目高の日々を僕に思い出させる。

卒業してから17年経つが、僕は未だにあの時語り合った夢の途中にいて、ツライこと、悔しいこと、上手くないことがたくさんある。

未熟な僕にとって、そんな本当の瞬間はいつも死ぬほど怖いものだから、怖気づいて逃げ出したくなった時には、大きく深呼吸をして、目高を思い出す匂いを胸いっぱい吸い込んで立ち向かいたい。

そしてこれからも、優しく温かい、だけどたまにちょっと切ない思い出に背中を押されて、目高生になったあの日から続くこの道を、いつまでも真っ直ぐに歩いていきたいと思っている。





# 2003年卒、白組副団長

高校55回生 小此木 翼

目高創立100周年おめでとうござい  
ます！

創立100周年にあたり冊子を作ると聞  
き、私にとって「目高」とは、3年間過ごし  
た時間はもちろん、その後の人生において  
も切っても切れない体の一部みたいな存在  
なので、拙文ながら寄稿させて頂きます。

私は、いや、私たちは目高で出会った同  
級生同士で結婚をしました。ちょうど30歳  
になる時でしたので、卒業してからは12年  
も経っていましたが、結婚式では目高の先  
輩や後輩、同級生が50人近くも駆けつけて  
くれました。目高の絆はいつになっても変  
わらないなと、とても嬉しく感動したこ  
とを今でも覚えています。その節はありが  
とうございました。おかげさまでハズも3  
歳になる息子も元気で毎日過ごしていま  
す。

1984年4月生まれの方は今年で35  
歳。気付けば目高を卒業してから17年が経

過し、改めて時の流れに驚いています。卒  
業してから25歳くらいまでの間はだいたい  
月2回のペースで目高の仲間と飲んでい  
ましたね。みんな他に友達いないの？ っ  
てくらいに。毎年旅行にも行くし、ホーム  
パーティーもするし、大人数で忘年会を  
やったり、先輩や後輩とも頻繁に遊んでい  
ました。20代後半くらいからはそれぞれに  
仕事で忙しくなったり家庭を持つたりで  
頻度は減ったものの、とにかくお祝いラッ  
シュで仲間内の誰かの結婚式に出席すると  
いう楽しみがありました。

目高生だけだった集まりも、今ではお互  
いの家族や子供が増えて、すっかり昔とは  
様変わりしながらも、相変わらず気の許せ  
るみんなと仲良くやっています。

それともうひとつ、私事ながら2年前に  
転職をしたのですが、実はその仕事もクラ  
スメイトの紹介だったので、同じオフィス  
に目高生、それも同級生がいるっていう不  
思議な感覚ですが、それだけで毎日が楽し  
いです。

こういう時代なのでSNSでの連絡も頻  
繁に、東京や日本にいない仲間とも気軽に

連絡が取りあえるので便利ですが、やっぱ  
り直接会うのが一番ですよ。来年はどう  
やらNYからようやく白組団長の彼も帰っ  
てくるようなので、盛大に同窓会でもやり  
ましょうね。企画倒れにならないよう動き  
ますので、先輩も後輩もその時はご協力宜  
しくです。

またお会いしましょう！

110年、120年とまだまだ続く目高  
のさらなる発展と、皆様のご健康とご多  
幸を願って。



## 編集後記

2年前の会報で記念文集の呼びかけをスタート。何人の方が応募していただけたのか、当初は不安でいっぱいでした。でも、恩師の先生方、高女の方、高校の方と、60余名の幅広い年代の同窓生からの手記をお送りいただき、無事、創立100周年記念文集「杉の友」を刊行することができました。本当にありがとうございます。

恩師の方の苦労話や今だから話せるエピソード、高女の方の戦争体験や平和への強い希望、高校の方の自主・自立の高校生活や部活動など、時代を反映した内容を昔懐かしい写真とともに読んでいきますと、高校時代にタイムスリップしたような感覚になりました。

巻頭の口絵は、「今昔物語」と題して、様変わりした学校、行事、祐天寺周辺の写真を並べて、今と昔を比較してみました。古い写真を見ていますと、「昭和の香り」が蘇ってくるような錯覚を覚えます。

100年をまとめるのにふさわしい内容になったと、校了をした時には、やっと肩

の力を抜くことができました。

手記と一緒に送っていただいた資料や写真は、随時、同窓会ホームページに掲載していく予定であります。そちらも楽しみにしていただけなら幸いです。

表紙のイラストは、小泉忠彦さん（15回生）が、昭和38年頃の都立目黒高校の記憶を呼び起こして、平成29年11月20日に描き上げてくださったものです。この場をお借りして御礼を申し上げます。

（スタッフ一同）



めぐろ山荘



キャンプファイヤー

母校創立100周年記念文集

杉の友

2019年8月1日 発行

編集 東京都目黒高等学校 同窓会

発行 東京都目黒高等学校 同窓会

〒153-0052

東京都目黒区祐天寺2-7-15

TEL 090-2638-3624

印刷 社会福祉法人 東京コロニー

東京都大田福祉工場

〒143-0015

東京都大田区大森西2-22-26

主な参考資料…めぐろ同窓会会報、雑誌「めぐろ」、各周年記念誌。

# 東京市立目黒高等女学校校歌

加藤 因 作歌

沖 不可止 作曲

落着いて ♩ = 100

1 に ほ ひも ゆー か - し む さ - し の つ み ど - り い ろ こ き を  
 2 ま な び の しー - し か つ つ き の か つ ら の あ  
 3 あ か る く なー ほ - く う る - は し く お し - へ ま も り て お

か - の う へ あ ま て る ひ か り か げ - う け - て や  
 を - の い ろ と こ よ の は る の な こ - や か - に ひ  
 こ - た ら ず か が や く く に の ひ の - も と - の を

す け く - わ - れ - ら ま な - お な り め ぐ ろ め ぐ ろ め ぐ  
 つ み て - わ - れ - ら は げ - む な り め ぐ ろ め ぐ ろ め ぐ  
 と め ゑ - わ - れ - ら つ と - め な む め ぐ ろ め ぐ ろ め ぐ

ろ ぞ う れ し き あ け - く - れ - の わ が ま な び や  
 ろ ぞ う れ し き あ け - く - れ - の わ が ま な び や  
 ろ ぞ う れ し き あ け - く - れ - の わ が ま な び や

## 東京市立目黒高等女学校校歌

目黒高等女学校校歌は、創立17年目にあたる1935（昭和10）年、赴任して間もない加藤因校長によって作詞され、音楽科の教諭であった沖不可止先生によって作曲されてできた。

加藤校長は、校歌制定の動機として、上級学校に入学した卒業生が、出身母校の校歌を歌えず悲しい思いをしたと話したことをあげ、どうしても校歌を作らねばならないと思った、と書かれている。そしてこの時から寝食を忘れた作詞活動が始められた。作曲の沖先生はこれについて、「校長先生より示された作詞は一点の非の打処もなく十分に私をして其の歌詞の中から感激を与えさせて呉れた。おそらく校長先生が意図されたであろう天地悠久なる大き心を、ハッキリ其の歌の中に知る事が出来た。そして私は歌詞の持つ感覚にひたってその趣きをそこなわぬ様に曲を付ければいいのであった」と述べ、「我々校歌はあくまでも森厳に、明朗に、しかも女性の優美さを兼備して居らねばならぬ。ここが一番大事なところで作曲者として苦心した点が存在したのであった。」（会誌6号）と語っておられる。

この間、諸先生方も幾つかの試作品に忠告助言をなされ、全校一体となって作られた校歌は、10月1日の東京市自治記念日の当日制定され、式後初めて、教職員生徒全員によって斉唱された。

1 匂もゆかし武蔵野の  
 みどり色こき丘の上  
 天照る光かげうけて  
 安けくわれら學ぶなり  
 目黒 目黒  
 目黒ぞうれしき  
 あけくれの わが學び舎

2 學びの校章かざし持つ  
 月の桂の青のいろ  
 常世の春の和やかに  
 陸みてわれら勵むなり  
 目黒 目黒  
 目黒ぞうれしき  
 あけくれの わが學び舎

3 明るく直くうるはしく  
 校訓 まもりて怠らず  
 輝く國の日の本の  
 乙女ぞわれら努めなむ  
 目黒 目黒  
 目黒ぞうれしき  
 あけくれの わが學び舎

